＊「お断り」
　この「物語」は、わたしの友人が創作した登場人物と設定を借りて書いたものであることをお断りしておきます。この物語はわたしの創作ですが、冒頭に友人の「著作」を一部改変して使用しています。
　それはこの物語の背景に、友人の著作『エターナルドリーム・炎の呪縛』という作品があり、これが本編の作者とは別人が書いた、いわゆる『二次創作』であることをご理解いただくためです。
　この物語を書き、公開する許可は得ていますが、決して「友人の作品の一部」として、正式に認められた『エピソード』ではありません。可能な限り、『エターナルドリーム・炎の呪縛』をご覧になってから、お読みいただけるようお願いいたします。

『エターナルドリーム・外外伝　封印の卵編』

＊都市伝説　夢探偵『真木刹那』

　溜め息をひとつ付き、グレーな気持ちでホームの壁に寄り掛かっていると、目の前を数人の女子高校生が通り過ぎた。彼女らの会話を聞くとはなしに聞いていた『高野雅之』だったが、次の言葉を耳にしたとき、驚いて思わず身を乗り出していた。
「ねえねえ知ってる？　３組の佐々木さん、『夢探偵』に会ったんだって！」
　・・・夢探偵？　お、おいまさか！　彼は耳を澄ました。
「えー、信じらんなーい！」
「まったあ、レミのときだって大嘘だったじゃん！」
「でも、今度のはマジらしいんだって！」
「マジでマジって、ヨーコのマジじゃ信じらんないよ！」
　ポンポンと投げ取りされる会話を聞きながら、雅之は身震いするような不思議な感覚に囚(とら)われていた。夢と現実との交錯(こうさく)、こんなことが実際にあり得るのだろうか？　沸き上がってくる好奇心を押さえ切れずに、雅之は少女達に声を掛けていた。
「ねえ、君達！　今の話、もっと詳しく聞かせてくれないかな？」
　少女らは別に驚くふうもなく、振り向いて雅之を見た。
「・・・ええ？　何のこと？」
「『夢探偵』がどうとかって、話してたじゃないか！」
　少女らは黙って顔を見合わせた。無理もない。突然声を掛けてきた見ず知らずの男からの怪しい「お願い」を、警戒しない方がおかしい。
「・・・あ、あの、俺さ、そういったネタを追ってる雑誌の記者なんだよ」
　誰もが知る広告代理店の、トップを争う営業マンであるプライドは捨てることにした。
「渡せる名刺があるような雑誌じゃないからさ、信用してもらうしかないないけど、話、聞かせてもらえないかな？」

少女達は、自分達が３人いるのを確認し合ってから合唱した。
「お茶、おごってくれるなら！」
「ケーキも付けるよ！」

「・・・夢探偵はね、三人いるのらしいのよ」
「三人？」
「そう、一番会ったって証言が多いのが、金閣寺のお坊さんよね！　お坊さんなのに、すっごいイケメン！」
「・・・ちょっと待って、じゃあその金閣寺のお坊さんは、男の人？」
「あったり前じゃん！」
雅之にとっては、「夢」の中にしか存在しない「夢探偵」からして当たり前ではない。それに雅之が会ったのは「女」の夢探偵だったはずだ。別の少女が、割って入った。
「あと、髭の爺さん！」
爺さんというからには、やはり男なのだろう。
「もうひとりは？」
また別の少女が、得意気に言った。
「会ったって人から直接聞いたわけじゃないから、『噂』だけどさ、」
その少女が、ストローをくわえながら上目使いに雅之を見る。もともと全部「噂」じゃないかと一喝したくなるのを、雅之は懸命に堪(こら)えた。
「いっつも黒い服を着た、すっごくタカビーな女らしいよ、」
それだ！　雅之は身を乗り出した。

プロローグ　「夢のオブジェ・封印の卵」

「・・・わたしは真木刹那、夢探偵よ。随分と大仰な『夢のオブジェ』を作り上げたものね、感心しちゃうわ」
水のようにうねる光の帯が螺旋(らせん)に巻上がって、卵の形を作っている。　「夢世界」では誰でも何でも作れるが、真木刹那の前に聳(そび)え立つそれは、明らかに異常だった。
「・・・ねえ、聞こえてるんでしょ？」
光の卵の腹の辺りが一瞬ゆるんで、膝を抱えた少女の姿が見て取れた。
「やっぱり聞こえてるんじゃない。そんなものに閉じこもってないで、わたしの話を聞く気はない？」
刹那の言葉を拒絶するように、光の帯が卵をきつく締め直す。
「まあ、聞いていた通りね。いい、わたしは夢探偵の真木刹那、あなたを助けに来たの。あなたは気に入らないかもしれないけど、あなたのお友達の依頼でね」
刹那の言葉に、光の卵がその輝きの色合いを変えたのを、今のところは答えとするしかないようだった。
「・・・これであなたの居場所はわかったことだし、あなたが嫌でもまた来るわよ、『早乙女愛里(さおとめあいり)』さん」

第一章　「依頼者」

　その日、「聖家族教会」を訪れたのはふたりの女子高生だった。
　三人の「夢探偵」は、それぞれに『事務所』という言うべき居場所を「夢世界」に持っている。「真木刹那」のそれは、建築界の鬼才アントニオ・ガウディが未完成のまま残した教会、「サグラダファミリア」だ。

　普段通り「受難のキリスト像」が取り次いだ依頼を、真木刹那は聖堂の奥まった一室に冷たい声音を響かせ、にべもなくはねつけた。
「・・・お断りして」
「ですが、刹那さま、」
「・・・引きこもりの女の子なんて、冗談じゃないわ。それにね、親兄弟が依頼してくるならまだしも、学校の先輩が依頼主なんて、どうせ大した問題じゃない決まってるでしょ！」
「おふたりの様子は、そうは見えませんが」
「ワガママな『女の子』にいちいち付き合うほど、わたしは暇じゃないの」
「ああ、それはわたくしも同感でございます」
「・・・それ、どういう意味？」

　夢世界の聖家族教会まで辿り着いた依頼者は、まず自分を見下ろすキリストの石像に依頼を告げ、取り次ぎを待たなければならない。刹那は教会の、自分用にしつらえた部屋で、キリスト像が送ってくる想念の声に答えるのだ。
「・・・あなた、わたしの傀儡（パペット）のくせに最近ひと言多くない？」
「一寸の虫にも五分の魂と申しますから、傀儡も長くやっておりますとそれなりに、」
　真木刹那が、同じ夢探偵の「日下部彰幻（くさかべしょうげん）」のように依頼者を招くことをしないのは、そうする事で依頼を選別するという意味がある。どんな依頼であろうと、依頼者が刹那に辿り着いた以上は、大した問題ではないなどと切り捨てるべきでないのは刹那自身が誰よりも分かっていた。必死な想念だけが、依頼者を刹那のもとへと導くのだから。
「・・・刹那さま、今日はなにやらご機嫌がお悪いようですが」
「あらどうも、余計なお世話さま」
　苛立たしげに髪を掻き上げた刹那の、今度は反対側の耳からキリスト像の声が届く。
「また『越界の鏡』で、現実世界の御自分をご覧になっていたのですか？」
「うるさいわよ」
「お気持ちが沈みますから、越界の鏡はお控えくださいといつも申し上げておりますでしょう、」
「あなたね！」
「わたくしは、この『夢世界』で困った人々を救う刹那さまが好きなのです。凛々しく戦う刹那さまは、とても美しくていらっしゃいますよ」
「・・・だから、その女の子達に会えと言うの？」

「はい。わたくしの眼を通して、見てみるくらいよいではありませんか。おやおや、何やら大変な事になっているようですよ」

　聖家族教会の西向き、「受難のフサァード」に立つと、「架刑のキリスト像」をまるで真上に見上げる事になる。「現実世界」のサグラダファミリアと違うのは、入り口が石の扉で堅く閉ざされていることだ。
「・・・いつまで待たせるのかなあ？」
「夢探偵さんって、きっと忙しいのよ。早乙女さんのために、もうちょっと我慢しなきゃ、ね、聖美」
「麗子もその辺に座っちゃえば？」
「だって、イエス様の前よ」
　同じ制服を身に着けた少女がふたり。すらりと美しい長身の少女は、しなやかに流れる黒髪も乱さず立っている。その『麗子（れいこ）』に比べれば多少ちんちくりんなもうひとり、『聖美（さとみ）』が、地べたに投げ出していた脚をばたつかせた。
「もう！　ふたりでやっと夢探偵を探し当てたんじゃん！　そりゃここにいる女の夢探偵は、態度がデカいってのは何度も聞いたけどさ、こんなに待たせるなんて酷いだろ！」
「・・・もう、聖美ったら、」
　麗子は、肩を竦（すく）ませ掌で頬を包むと、溜息混じりに聖美を見詰め返した。幼子（おさなご）をたしなめるような仕草に、された方は頬を膨らませる。
「だあ！　だってこの夢探偵に頼まなきゃ、愛里を助けられないだろ！　愛里は絶対普通じゃないよ！　きっとこの夢の世界に関係があるんだってば！　だからあたし達じゃ駄目なんだよ、夢探偵でなきゃ！」
　跳ねるように立ち上がった聖美が、麗子に詰め寄った。
「いつも言ってるだろ！　他人に気を遣って、いい子でいるだけじゃ駄目なんだって！　麗子はいつもそうじゃん！　ほんとに愛里を助けたいんなら、このぐらいしなきゃ！」
　聖美は足を踏み鳴らし、幼い頃から慣れ親しんだ「空手」の「押忍」をきめた。
「うおりゃぁぁ！」
「聖美！」
　小柄な身体からは想像も出来ない聖美の「回し蹴り」が、壁面に叩き込まれる。ふたりが履いているのは通学用の革靴だ。石造りの教会も、堅い靴底で蹴り飛ばされては無傷ではいられない。
「こら夢探偵！　早く出て来い！」
「ちょっ、ちょっと、聖美！　そんなこと駄目よ！」
「早く出てこないと、もっとやるぞ！」
　聖美が睨み上げたキリスト像は沈黙したままだ。鳩が一羽、羽音をさせてキリスト像の肩に留まった。
「なんだよ！　鳥まであたし達を馬鹿にすんの！」
「聖美、落ち着いて！　鳩は関係無いわよ！」
　なだめようとする麗子を振り払い、聖美が正拳を構えたその時、『鳩』が叫んだ。
「止めなさい！」

ふたりの足下に舞い降りた『鳩』は、驚いているふたりの周りを歩き回りながら言葉を続けた。
「あなた馬鹿じゃないの！　石の壁を、拳で殴ったらどうなると思ってるの？」
リズミカルに、『鳩』の頭が前後する。
「それにね、たとえ夢世界でもここは『教会』、信じる人にとっては『神の家』なのよ。少しは敬意を払ったらどうなの？」
「・・・麗子、鳩が、喋ってるよ？」
「・・・あ、あの、もしかしてあなたは、」
ぽぽぽ、と歩みを早めた『鳩』が、ふたりの正面に回って止まった。
「そうだけど、あなたもあなたでしょ。こんな乱暴者でも友達なら、ちゃんと止めなきゃ。いったいどういう関係なの、あなた達？」
「えぇ！　夢探偵って鳩なの？」
「違うわよ、聖美！　ここは夢の世界なんだから、夢探偵さんは鳩に姿を変えてるのよ」
「・・・出て来ちゃったんだからしょうがないわね。怪我をしたくなかったら、ふたりともどこかに掴まってらっしゃい」

鳩の小さな翼が空を切ると、突風が巻き起こった。反射的に居並んだ彫像の頭を掴んだ聖美に、麗子がしがみつく。風が止み、乱れた前髪の隙間からふたりが覗き見た場所には、冷たい視線の美しい女が立っていた。
「・・・礼儀だから先に名乗るわね。わたしが、真木刹那よ」
強風に対抗する姿勢のまま、麗子と聖美は夢探偵を見詰める。
「ほら女子高生！　相手が名乗ったんだから、次は何をすればいいか分からないの？」
笛で整列を命じられた小学生のように、麗子と聖美は慌てて刹那の前に並んだ。
「あの、すみません、わたし、宝屋麗子（たからやれいこ）っていいます」
完璧な姿勢のお辞儀にあわせて滑り落ちた黒髪を、麗子の指が掻きあげた。
「そっちは？」
「千秋聖美（ちあきさとみ）」
「です、でしょ？　それにしても、それどっちが名前？」
「なんだよ、名前は聖美（さとみ）に決まってるだろ！　あたしゃ外人じゃないんだから！　千秋って家に生まれたのは、あたしのせいじゃないやい！」
「それはそうね。でもあなた、もう少し丁寧な言葉遣いができないの？　わたしがあなた達より年下に見える？」
「それはそうだけど、こっちはやっとあんたを探し当てたってのに、さんざん待たせた上にいきなり現れてさ、こっちの態度が悪いって文句付けることないだろ！」
いきり立って踏みしめた聖美の右足に、激痛が走った。
「あ、痛ったあ！」
「やだ、聖美、大丈夫？」
「あんなに思い切り壁を蹴るんだもの、当たり前よね」

刹那は、胸を反らして腕を組み、視線をふたりの女子高生の顔からつま先、つま先から

顔へと移動させた。刹那の視線に、麗子は小首を傾げ、聖美は睨み返す事で答える。
「制服の趣味がいいようだから、ふたりともいい所の高校の生徒みたいね。それに、麗子さんでよかったかしら、あなたは気に入ったわ。学校の後輩を助けて欲しいんだったわよね。引き受けるかどうかは、まずお話を聞いてから、でいいわね？」
「わっ、それほんと？　あ痛たた・・・、」
　聖美がパッと表情を明るくする。痛みにかがみ込んだ聖美を支えながら、麗子は刹那に微笑みかけた。
「ありがとうございます、夢探偵さん」
「しょうがないわ。あなた達が、ここまで辿り着いてしまったんだし。その後輩のために一生懸命だっていうのは認めてあげる。教会を殴ろうとするくらいね」
　ばつが悪そうに頭を掻(か)く聖美の顔を覗き込んで、麗子がクスっと笑った。
「じゃ、ここで立って話すのもなんだから、移動しましょうか。お茶でも飲みながらゆっくり話を聞くわ」
「あの教会の中に入れてくれんの？」
「それは駄目、あの中には、誰も入って欲しくないから」
「じゃあ、あの、何処へ行くんですか？」
　聖美と麗子は、改めて聖家族教会の周囲を見回した。教会の敷地は公園のようで、その向こうにはレンガ色の異国の街並みが続いている。麗子も聖美も、テレビや写真でなら見知っている有名な教会と有名な街。でもここには聖美と麗子、そして目の前の夢探偵以外に人の気配は無かった。どう考えても、少し行った先の角の店に入り、気軽にお茶を注文できる雰囲気ではない。
「・・・やっぱりここって、『夢の世界』なんだね、麗子、」
　麗子も不安げに頷く。
「そうよ。だから移動するって言っても、なにもてくてく歩って行く必要はないの。わたしはそれでも構わないけど」
　刹那は右腕を伸ばして、自分を見詰めるふたりの顔の前に裏返した掌を差し出した。
「でもあなた、足が痛いんじゃないの？」
　刹那の指がパチンと鳴った。

　ふたりとも、驚いて瞬きをしただけのはずだった。
「どうしたの？　早く座ったら？」
　目の前の刹那は、すでにテーブルについてティーポットにお湯を注いでいる。自分達に起こったことが信じられない麗子と聖美は、左右に大きく首を巡らした。
「わ、な、なにこれ？」
「まあ、なんて素敵なイングリッシュガーデン！」
「え？　こういう庭って、そう呼ぶの？」
「見て見て、聖美！　あそこ、綺麗なオールドローズがあんなにたくさん咲いてる！」
「よかったわ。麗子さんに、相応しい場所だったみたいね」
　『イングリッシュガーデン』などと呼ぶには、可愛らし過ぎる庭を持つ小さな屋敷のテラスに、夢探偵と女子高生は移動していた。小さなテーブルに椅子が三脚、上品なティー

セットが、ゲストの着席を待っている。
「すごい！　夢探偵って何でもできるんだね、魔法使いみたいだ！」
「魔法ではないわ。あなた達がこの夢世界の仕組みをよく知らないから、そう思うだけよ」
　静かにそう答えた刹那に再び促(うなが)され、ふたりも席に着いた。
「麗子さん、お茶はミルクを先に注いだ方がいいかしら？」
「あ、はい、お願いします」
「スコーンはプレーンしか用意しなかったから、お好きなものを付けて召し上がれ」
「はい、ありがとうございます」
「聖美、あなた日本茶にお煎餅がよければそうするけど？」
「え、ミルクティーでいいよ、って、ちよっと夢探偵！」
「なに？」
「なんで麗子は『さん』で、あたしは呼び捨てなんだよ！」
「その相手に相応しいおもてなしをするのが、わたしの信条だからよ」
「あー、なんか今もの凄く失礼な事言ったろ！」
「あら心外ね。あなたに尽くさなければならない礼儀は、ちゃんと尽くしているつもりよ」
　またもや頭に血が上りそうな聖美の、制服の袖を引っ張って麗子が囁く。
「ちよっと聖美、私達は、早乙女さんの事を夢探偵さんにお願いしに来てるんでしょ」
「でもさあ！」
「まだ引き受けてもらえるって決まった訳じゃないのよ。いい子だから大人しくして」
「なんだよ、麗子まで！」
　とても面白いものを見るような瞳の夢探偵が、ふたりにミルクティーを差し出す。ゆったりと、ティーカップの紅茶が揺れた。
「あなた達がわたしに依頼したいと思っている話を聞く前に、説明しておかなければならないことがあるわ」
　刹那は、今まで全ての依頼者にそうしてきたように、「夢世界」は「眠る人間の想念」が集う場所であり、睡眠中の脳が生み出す個々別々のビジョンではないこと、そしてこの夢世界は、人間の想念が創り上げた擬似的物質で満たされ成り立っていることを、少女達に理解させた。

「・・・つまり、現実の世界と同じように見えても、この夢の世界はすべて人の心が生み出したものの集まり、ということですか？」
「そうよ。あなた達が見ているこの庭も、飲んでいるお茶も、すべてわたしの想念が作り出したものなの。だから魔法じゃないって言ったのよ。わたしはあなた達より上手に、夢世界の仕組みを操れるだけ。でもだからこそ夢は怖いのよ。人間の心が何でも作り出してしまう。場合によっては、それが現実世界の方に害を及ぼすことだってあるわ」
「そう、そうだよ！　愛里もきっとそうなっちゃったんだ！」
「聖美もよく理解できたようだから、そろそろあなた達の依頼を伺(うかが)いましょうか？」
「・・・あの、助けていただきたいのは、早乙女愛里(さおとめあいり)さんといって、わたしと聖美の、新体操部の後輩なんです」
「あ、愛里は一年、あたし達は二年生なんだ」

「胸の校章の、金糸の二本線はそういう意味ね。でもそう、麗子さんって新体操をやっているのね。あなたにはとても似合うわ」
「麗子は凄いんだ！　インターハイ出場を狙えるって言われてるんだから！」
「そうなの。でも聖美、あなた空手部じゃないのね？」
「え、うちは女子校だから、空手部なんて無いよ。空手は近所の道場で、ちっちゃい頃から習ってるだけ」
「もしかして、あなたも新体操の選手なの？」
「一年の時はね。でも今は麗子のマネージャーって感じかな、」
「そう、よかったわ」
「ど、どういう意味だよ、それ！」
「で、その早乙女さんがどうしたの？　なるべく詳しく説明してちょうだい」
　ティーカップを胸に抱いていた麗子が、溜息をついた。
「麗子、あたしから説明しようか？」
　麗子と聖美が互いの眼を見合い、麗子が頷いたことに眉をひそめた刹那は、それでも少女達がするようにさせておいた。

「あのさ、なんていうか、麗子と愛里にある事があってから、愛里の様子がおかしいんだ。あ、ちゃんと学校には来てるんだよ。でも部活には来なくなっちゃったし、なんか変なんだよ」
「どう変なの？」
「なんていうかさあ、いくら話し掛けても、まるでわたしと麗子だけが見えてないっていうか、もともと内気な子だから、周(まわ)りの人は気付いてないみたいなんだけど、」
「聖美、もう少し具体的に説明してくれないかしら」
　刹那は、あえて麗子と愛里との「ある事」には触れずに先を促(うなが)した。聖美が唇を噛む。
「あの、愛里ってさ、あたし中学が同じだったし、家も近いからよく知ってるんだけど、すごくいい子なんだよ」
「きっとそうでしょうね」
「でも気が弱くてさあ、だからあの子が、ひとりで新体操部の見学に来た時には、あたしもビックリしちゃったんだ」
「それで、その愛里さんは、新体操部に入ったのね」
「うん」
「そしてあなたが驚いてしまうくらい、一生懸命に新体操を頑張ってた、違う？」
「うん、そうだよ！」
「そうなんですけど、でも、あの・・・、」
「でもそれは、大人しい女の子が、素敵な先輩に憧れたから出せた勇気だった。そう理解すればいいかしら？」
「なんか、夢探偵って凄いな、なんでも分かっちゃうんだね」
「こういうのは年の功って言うのよ。夢探偵とは関係ないわ」
　たっぷりとジャムをのせたスコーンを手に、へえ、という顔をする聖美から、刹那は麗子へと視線を移した。

「で、麗子さん、その『素敵な先輩』はもちろんあなたでしょうけど、早乙女さんとあなたとのトラブルってなに？　まさかラブレターでももらって困ってる、なんて無邪気なお話じゃないわよね？」
「あ、それはね！」
「・・・聖美、やっぱりわたしからちゃんと説明するわ」
「そうね、その方が助かるわ」
　テーブルのティーカップに添えていた両手を引いて、膝の上に組み直した麗子が、ひとつひとつ確かめるような口振りで話し出した。

「・・・その日は、コーチはお休みで自主練習だったんです。みんな暗くなる前には練習を終えたんですけれど、わたしは、演技でどうしても納得できない所があって残ったんです。そうしたら早乙女さんも、もっと柔軟を頑張りたいって言って、」
「ふたりきりになったってこと？」
「はい」
「聖美は、一緒じゃなかったの？」
「うん、その日はお母さんも仕事で遅くてさ、妹と弟だけにしておけなかったから」
「・・・それで、あの、危険な演技の練習は、本当はコーチが居ない時には禁止されているんですけど、わたしどうしてもやりたくて。よせばよかったんですけど、やっぱり失敗して、足を捻(ひね)って倒れてしまったんです。早乙女さんが、驚いて助けに来てくれました」
「それから？」
「・・・その、早乙女さんがわたしを抱き起こしてくれて、それで、凄く真剣な早乙女さんの顔がすぐ目の前にあって、あの、それから、」
　言い淀(よど)む麗子の表情を、聖美が心配そうに覗き込む。刹那は、肘を突いて組み合わせた掌にのせた顎(あご)を、軽く突き出した。
「要するに、なんとなく危ない雰囲気になって、迫られちゃったのね？　キスでもされそうになった？」
「ちょっと、夢探偵！　そんな馬鹿にした言い方することないだろ！　麗子は愛里の面倒をすごくよくみてたし、愛里は愛里で、麗子のことが好きで好きでしょうがないからそうしちゃったんだから！」
「聖美、お友達や後輩想いなのは分かるけど、わたしが黙って聞いていたら、麗子さんはもっと詳しく説明しなきゃならなくなるんじゃないかしら？　女の子同士っていうのは、確かに少女コミックみたいなお話だけど、誰かを愛したら、その人と触れ合いたいって思うのは自然な事よ。馬鹿になんてしてないわ」
　刹那の言葉に、ふたりは揃って夢探偵の顔を見た。冷たく美しい表情はそのままだが、嘘を感じさせるものは何処にもなかった。
「・・・それなら、いいけど、」
「麗子さん、それからあなたがどうして、早乙女さんがどうしたか、後はそれだけを聞かせてちょうだい」
「はい、わたし、どうしていいか分からなくて、早乙女さんを突き飛ばしてしまったんです。早乙女さんはじっとわたしを見ていて、わたし、何か言わなくちゃいけなかったのに、

なんにも言ってあげられなくて、早乙女さんが体育館から飛び出して行くのを、黙って見ていてしまったんです、」
「誰でもそうするでしょうね」
「わたし、早乙女さんのこと嫌いじゃないんです！　ただ驚いてしまっただけなんです。それなのに、先輩なのに、わたし早乙女さんにきちんと話してあげられなくて、」
「もういいわ、麗子さん」
　刹那は、麗子の潤んだ瞳のためにハンカチを差し出した。
「あ、すみません、大丈夫です、自分のがありますから、」
「それで聖美、相談されたあなたも、お友達と後輩のために一生懸命になっているというわけね」
「うん、だってほっとけないだろ！」
「でも聖美、そんな事があったなら、その早乙女さんが新体操部に来なくなって、麗子さんやあなたを避けようとするのは当然の事よね。内気な分だけ、自分のした事にいちばん驚いているのはその子でしょうから。なぜその問題を解決するのに、夢探偵が必要だとあなた達が思ったのか、それが分からないわ」
「あー、それは、なんて言うか、そう思ったのは、あたしと麗子の夢のせいなんだ」
「あなた達の夢？」
「あたしと麗子ってさあ、けっこう同じ夢を見るんだ。学校の、体育館の夢」
「そうなの？」
「あたしの場合、いつも麗子が出てきてふたりで話すんだ」
「あ、わたしの夢にも、聖美がいつも出てきます」
「仲がいいのね。他人から見ると、ちょっと不思議だけど、」
「でね、その日の夢に、愛里が出て来たんだよ。わたしは麗子と愛里に起こった事なんてなんにも知らなかったのに、愛里が体育館の隅で、泣いてる夢だったんだ」
「わたしも同じ夢を見ました。夢の中だっていうことはわかっていたんですけど、ちゃんと早乙女さんとお話がしたくて。でもわたしの声は、早乙女さんには聞こえないみたいな、そんな感じでした」
「そして次の日、麗子さんから事情を聞いた聖美が、愛里さんと話しに行ったんでしょ？　あなたなら、頼まれなくても引き受けそうだものね」
「うん、クラスの子に呼び出してもらってさ、廊下で話したんだ。でも愛里、その時は一瞬だったんだけど、あたしのことが誰だかわからないって顔したんだよ。変だなって思ったんだけど、ちゃんと部活に来て、麗子と話すって約束させたんだ」
「でも、来なかったのね？」
「はい。その日のわたし達の夢にも早乙女さんは現れて、ただ泣いているだけでした」
「次の日からもそんな繰り返しでさ、でもそれがどんどん酷(ひど)くなったんだ。中学の時から、あたしのこと千秋先輩とか、千秋さんって言ってくれてたのに、今は先輩とはどこかでお会いしましたっけ？　なんて言うんだよ！」
「わたしのことも、新体操部の事も、もう覚えていないようなんです」
「とうとうあたし達の夢にも出てこなくなっちゃってさ、」
「それで、わたし達考えたんです。夢から帰ってこれなくなって、眠り続けている人がい

るって話を読んだことがあります。だから早乙女さんは、心の中のあの日の出来事、わたし達に関係するところだけ、夢の中に置き忘れてきてるんじゃないかって、」
「だってそうなら説明がつくだろ。それで思い出したんだよ、『夢探偵』の噂を！」
「・・・人の心は複雑なものだから、夢の世界とは関係なく、心を閉ざしてしまうということもあるんじゃなくて？」
「なんだよ、それおかしいよ！　夢の世界はひとりひとりのものじゃなくて、みんな同じだって言ったのあんただろ！　あ、ごめん、あんたじゃないけど、だったらあたし達の夢に愛里が現れて、泣いていたのにも意味があるはずじゃん！」
「それがあなた達の作り出した傀儡（パペット）ではなく、早乙女さん本人、所有者（オーナー）ならね」
「・・・あの、夢探偵さん、」
「『刹那』でいいわ」
「あの、刹那さん、やっぱり、引き受けていただけないんでしょうか？」
　刹那は、微笑んで答えた。
「いいえ、引き受けるわ」
　あっさりと願いを聞き入れられ、喜ぶより先に驚いているふたりに刹那は言った。
「ふたりとも、お茶をもう一杯いかが？」

　庭園の風景の上に広がる空に、刹那が視線を送る。
「そろそろ、あなた達は目覚める時刻みたいね。時間がないから手短に済ますわね」
「あ、はい」
「う、うん、いいけど、」
「あなた達の依頼を解決することでわたしが得る報酬（ほうしゅう）として、依頼者であるあなた達の夢の造形物（オブジェ）から、わたしが選んだものを頂（いただ）くわ」
　ふたりは頷いた。聖家族教会の夢探偵がそう求めてくることを、夢世界で刹那を尋ね歩く間に、ふたりは何度も耳にしていた。
「うん、それでいいよ！」
「本当に分かっているの？　それはあなた達にとって、かけがえのない思い出かもしれないのよ？」
「はい、それでいいです。どんな犠牲を払ってでも、わたし早乙女さんのこときちんとしたいんです」
「・・・わかったわ」
　テーブルの上で重ね合わされていた刹那の両手の指が、キュッと組まれた。
「たぶんあなた達が、その早乙女さんと夢世界の関係を疑ったのは正しいと思う。いえ、あなた達が考える以上に、事態は深刻かもしれないわね」
「どういうことですか？」
「あなた達は、早乙女さんの心の、ある部分だけが夢世界に囚（とら）われてると思ってるみたいだけど、夢の世界は、そんなに甘いものじゃないの。夢に逃げたりすれば、たちまち心の全てを夢に喰い尽くされてしまうのよ」
「・・・よくわかんないよ」
「要するに、このまま放っておけば、早乙女さんは一生眠り続ける事になるかもしれない

ってことよ、聖美」
　刹那は、再び空を見上げた。
「引き受けた以上、全ての責任はわたしが持つわ。あなた達は、わたしの言った通りにしてちょうだい。まずは、夢世界の何処かに閉じ籠もってしまったかもしれない、早乙女さんを捜すことね」
「どうやるの？　あたし手伝うよ！」
「それはわたしの仕事よ。わたしを探し当てることが出来たからからといって、この夢世界で自分にも何かが出来るなんて思わないで。あなた達は、現実の世界で、早乙女さんの心に働きかけ続けてくれればいいわ。今まで通りのことをしてくれればいいの」
「でもそれじゃあ、どうなってるのか、あたし達にはわからないじゃん！」
「もちろん、定期的に報告はするわ。これで正式に、あなた達はわたしの依頼者になったわけだから。時間と場所を決めて、この夢世界で落ち合う事にしましょう。そうね、最初は三日後、場所はあなた達がよく夢に見る体育館でいいわね？」
「三日後の夜に、体育館の夢を見ればいいんですね。あの、でも刹那さんはどうやって、わたしや聖美の夢の場所に来るんですか？」
「わたしは夢探偵よ、麗子さん」
「あ、すみません、そうですよね」
「それとふたりとも、これを持っていって」
　ふたりに差し出された刹那の掌の上には、赤い石がはめ込まれたブローチがふたつ乗っていた。
「可愛いブローチですね、でもあの、これをどうすれば？」
「わっ、なにこれ？　もしかして探偵団バッジ？」
　刹那が、声を立てて笑う。
「そうね、真木刹那探偵団よ。あなた達の依頼が解決するまで、これを肌身離さず身に着けておいて欲しいの。なるべく、他人の目には触れないようにね。それと、契約が完了したら必ず返してもらうわ。夢世界の物を、現実の世界に残しておく事は許されないから」
　ふたりは、ひとつずつブローチを受け取った。麗子はハンカチで包んで胸の内ポケットに、聖美は少し眺めてからスカートのポケットにねじ込んだ。
「あなた達もう消えかかっているから、最後に言っておくけど、」
「え？」
　刹那の強い口調にふたりが顔を上げると、ふたりからは刹那の方が霞(かす)んでいるように見えた。
「絶対に夢世界で勝手な行動はしないで、いいわね、絶対よ！」

　アフタヌーンティーの席から麗子と聖美が完全に姿を消し、刹那がふたりのティーカップを手元に引き寄せると、架刑のキリスト像の声が刹那の耳に届いた。
「・・・やはり、お引き受けになるんじゃないですか、刹那さま」
「だって、しょうがないでしょう！」
　キリスト像は言葉を返さない。それでも笑っているのが刹那には分かった。
「まったく、その早乙女さんより、聖美の方が心配だわね。何かしでかすんじゃないかし

ら？　麗子さんも、少しおとなしく振る舞い過ぎるのが気に掛かるわ」
「さようでございますか？」
「そうよ！」
「それではまず、」
「『早乙女愛里』を捜すわ。目星はついているから、すぐに見付かるでしょうけど」

挿入　「封印の卵・その一」

「ねえ、早乙女さん、聖美、あ、千秋先輩が、あなたの所に行ったでしょう？」
　刹那は、早乙女愛里の夢のオブジェ、光の卵の前に立っている。
「なにか話したの？」
　光の卵は相変わらず、丸みを帯びたその表面に幾筋もの光を走らせるだけだ。刹那がここを訪れるのは、もう三度目だった。明日は麗子と聖美に約束した、調査報告の日だ。
「・・・あなたのこの卵、前より大きくなってない？」
　卵の光に変化はない。
「あのねえ、わたしと言葉で話してとは言わないから、はい、いいえくらいの意思表示はしてもらえないかしら？　聞いてくれてるのかどうかも分からなかったら、話す甲斐が無いでしょう？　そうだ、『はい』なら青く、『いいえ』なら赤く光って見せて。あなたが作ったオブジェだもの、簡単でしょ？」
　刹那が辛抱強く待っていると、まるで根負けしたように、青い光が卵の腹の辺りを横切った。
「それでいいわ」
　今度は間を置かずに卵が青く光る。
「あら、愛里さんあなた、聖美の言う通りほんとうに素直でいい子なのね」
　赤い光の点が、卵のあちこちで点滅した。
「・・・まあいいわ。やっと返事をしてくれたから、大切な事だけ言うわね。あなたのそのオブジェ、下の方に黒い筋が入ってきているのが見える？」
　返事は青。
「それは、この夢世界に巣くう『悪霊』よ。現実世界での命を失っても転生できずに、想念だけが夢世界を徘徊している危険な存在なの。あなたみたいに、夢世界に心を閉じこめるなんてことをしていたら、悪霊を引き寄せてしまうのよ。悪霊に人の心は無いわ。取り込まれてしまったら、欲望しか持たない醜い存在に、あなたもなってしまうわ」
　下から上へと、螺旋を描く光の帯が乱れ始める。
「ねえ、麗子さんも聖美も、あなたを救いたいって一生懸命なの。それなのにどうして、もう一度ふたりと話してみようって思えないの？　頑なに心を閉ざしてしまうのは、なんの解決にもならないんじゃないかしら？」
　刹那は、組んでいた腕をほどき、右の掌で自分の頬を包んだ。
「わたしは夢探偵よ。力尽くであなたを現実世界に引き戻すこともできるわ。でもそうしたくないの。こんな事は止めて、あなた達自身で解決するのが一番いいと思う。会って話したからわかるけど、麗子さんと聖美なら大丈夫、あなたを傷付けたりしないわ」

青と赤の光が、激しく明滅を繰り返しながら入り乱れた光の卵は、やがて輝くのを止めて沈黙した。
「・・・だいぶ混乱しているようね。あなたは若いから自分に手一杯になってしまうのも分かるけど、もう一度落ち着いて考えてみて。ともかく、このままでは危険よ」
刹那には、心の壁に自らを閉じこめた少女が、息をすることすらできないでいるように思えた。

第二章　「愛里」

「聖美、聖美！　早くしないと遅刻するわよ！」
慌てて制服を着込んだ千秋聖美は、転げ落ちそうな勢いで階段を駆け下りた。
「お母さん、お早う！」
ダイニングルームに飛び込み、椅子に座りもせずにテーブルの上の目玉焼きにかぶりつく。大声を張り上げた聖美の母親はキッチンに、まだ幼い妹はのんびりと朝食を食べていた。行儀よく牛乳を飲んでいた妹の智美(ともみ)が、毎朝のこととて相変わらずの姉に、天使のように笑いかける。
「おはよう、おねえちゃん」
「あー、智美い、お鼻の下が、牛乳お髭さんになってるぞ！」
大きな瞳が、鼻の下を見ようと必死に寄せられる。
「えい、こうしてやる！」
聖美が両手の親指で智美の上唇を拭うと、智美は楽しそうにいやいやをした。
「お父さんと聡(さとし)は？」
「もう、とっくに出たに決まってるでしょ。ちゃんと座って、牛乳くらい飲んで行きなさいよ、聖美」
「もう時間無いってば！」
フライ返しを手に、母親がキッチンから顔を出す。聖美が冷めたトーストに手を伸ばそうとするやいなや、フライ返しの一閃が打ち下ろされた。
「こら、そんなもの歩きながら食べるつもり？　これ持っていきなさい」
お弁当の分より余計に焚(た)いたご飯が、愛らしいお結びに変身した包みが差し出される。
「もう、痛いよ、お母さん。でも変だよなあ、あたし空手黒帯なのに、なんでお母さんの攻撃は避けられないんだろう？」
「あんたを生んだのがわたしだからでしょ。そんなことより、あんたの高校はお嬢様学校だっていうのに、自分の娘が朝からもそもそ食べてる姿を見られてるなんて、お母さんそっちが恥ずかしいわ」
「え、だ、大丈夫だよ。お嬢様なんていったって、みんな、休み時間に駄菓子とか食べてるし」
「あんたが食べたら駄菓子だけど、麗子さんみたいな、大きなお屋敷のお嬢さんが食べたら御菓子なの」
「へいへい。あ、でも、お母さんのおにぎり、麗子もおいしいって言ってたよ」
「あ、あらそう？」

「隙あり！　行ってきまあす！」
「あ、こら、牛乳！」
　自分のお弁当の入った巾着を、ひったくるようにして聖美は玄関へと遁走(とんそう)を決め込んだ。
　軽くて小刻みな足音がついてくる。大急ぎで靴を履こうとする聖美に、小さな掌から、銀の細工に赤い石のブローチが渡された。
「おねえちゃん、これ、」
　『夢探偵』から渡されたブローチを、ダイニングルームで落としてしまったのに気付かなかったらしい。
「わ、危ない危ない！　それ大事なものだったんだ、ありがと、智美」
「もう、おねえちゃん、ダメダメよう」
「あっはは、うん、気を付けるよ。んじゃ、行ってくるね！」
　妹の頭をくちゃくちゃに撫でて、聖美は家を飛び出した。

　途中人家の隙間などを失敬しながら、聖美は学校までの道を走った。校門を抜け、靴を下駄箱に放り込む。聖美と麗子のクラス「２Ａ」は、二棟ある校舎のうち校庭に面した方の二階の端にある。始業直前の校舎の階段を駆け上がり、教室の引き戸を開けて飛び込むと、教壇に担任の姿は無かった。
「セーフ！　みんな、お早う！」
　教室に笑い声が広がる。
「ほら、だから千秋さん、今日も間に合うって言ったじゃない」
「あーん、一週間ご無沙汰だったから、今日は遅刻かと思ってたのになあ」
　聖美に聞こえているのを承知で交わされる、クラスメート達の談笑をよそに、聖美の眼は麗子を捜した。ひとつだけ空いている窓際の席、聖美の席のひとつ前に座った麗子だけは、静かに聖美を見詰めている。
　鞄を机の上に置き、聖美はお早うも言わず、スカートのポケットから取り出したブローチを麗子に見せた。
「ねえ、麗子、これ、」
「うん、聖美」
　麗子は頷き、制服の襟に裏返しで付けているブローチを聖美に示した。
「やった！　あたし達ほんとに、夢探偵に会ったんだね！」
「ちょ、ちょっと聖美、声が大きいわよ、」
「あ、ごめん」
　音を立てて椅子を引き、勢いよく腰を降ろして麗子に顔を寄せる聖美。麗子は、口元を掌で隠すようにしながら、
「・・・ともかく、お昼休みにふたりで話しましょう。新体操部の部室なら誰も来ないと思うし。夢探偵さん、あ、刹那さんに言われた事をもう一度よく整理して、わたし達がどうすればいいのか、考えるべきだと思うの」
「うん、あたしもそう思う」
「それと聖美、刹那さんから預かったブローチ、なるべく他人に見られないようにって言われてるんだから、やたらと出したりしちゃ駄目よ」

「うん、わかってるよ、大丈夫だって」
　聖美が鞄も片付けず、真っ先に取り出したお結びをひとつ平らげた時、「起立！」という日直の号令がかかった。

　運動部の部室が集められた長屋のような部室棟は、体育館と渡り廊下で繋がっている。新体操部の部室の中は、左右にロッカーが並び、窓のある奥に手具などが整理されて置いてある。予定表や連絡事項を書き込むホワイトボードには、三年生の先輩達の文字で、「宝屋！　インターハイを狙え！」と書かれていた。
「麗子、食べないの？」
　部室の真ん中に置かれた折り畳みの机を挟んで、聖美と麗子は合い向かいに座っている。あれやこれやと昨夜の事を話すうち、聖美のお弁当はすでに空になっていた。
「しっかり食べなきゃ駄目だよ！　今日も猛練習が待ってるんだからさ！　愛里のことなら、夢探偵にも頼めたんだし、後はあたしがなんとかするから！」
「うん、でも、刹那さんは、早乙女さんが、わたし達が思うより危険な状態かもしれないって言ってたから・・・」
「偉そうに引き受けたって言ってたんだから、なんとかする自信があるんじゃないの？」
「うん、そうだけど、」
「でさ、結局あの夢探偵は、あたし達にどうしろって言ってたんだっけ？」
「昨日の夜の三日後だから、明後日の夜に夢の中の体育館でまた会うって事と、夢の世界の事は刹那さんに任せて、この現実の世界で早乙女さんに働きかけて欲しいって、」
「よっしゃー！　じゃあ今日の放課後、また愛里の所に行ってくるよ！」
「わたしも一緒に行くわ」
　麗子の口を突いて出た言葉に、聖美が眉をひそめる。
「はあ？　なに言ってんの麗子。麗子は練習があるだろ、地区大会はもうすぐだよ。愛里のことはあたしに任せるって言ったじゃん」
「だって聖美、あなたにばかり押し付けて、もともとわたしと早乙女さんの問題なのに、それにこのままじゃわたし、」
「あー、あー、あー、麗子、それ約束違反！」
　聖美は、ピンと立てた人差し指を麗子の鼻先に突き出した。驚いた麗子が仰け反る。
「麗子は新体操を本気で頑張る、あたしは麗子のために頑張る、それが約束！　愛里が心配だからとか、あたしに悪いからとか、そんなのちゃんと頑張らない言い訳だよ！」
「聖美、それは違うわ！」
「違わない！　インターハイに出れなくてもいいけど、新体操の演技で、本当の麗子をあたしに見せてくれるまで、この約束は終わらない！　だから愛里のとこにはあたしひとりで行く、麗子は練習するの！」
「聖美、」
「だから、お弁当、ちゃんと食べてよ。愛里は、きっとあの夢探偵がなんとかしてくれるよ。引き受けたら必ず解決するって評判なんだからさ、」
　溜息をついた麗子が箸を取ると、口に運ぶ動作を聖美が目で追う。食べ終わるまで、聖美はそれを繰り返した。

放課後、何度も振り返る麗子を部活へと追い出し、聖美は早乙女愛里の教室に急いだ。教室の外から、目に付いた愛里のクラスメートに呼び出してもらう。その度に違う生徒が応対するのは、早乙女愛里に、特に親しい友達がいないからだろうと聖美は思った。
「・・・早乙女さんですか？」
「うん、そう。もう、帰っちゃったかな？」
「確か、今日は早退だったと思いますよ。午後の授業から、居なかったような気がしますから」
「え？　どっか具合でも悪かったの？」
「さあ、よくわかりません」
「あ、そ、そう。うん、わかった、ごめん、ありがと」
愛里の家は、中学の頃から知っていた。同じ中学の学区内なのだから、そう遠いはずもない。かなり歩くことにはなるが、帰り道の途中で、普段は曲がらない角をひとつふたつ曲がれば行ける。

幾度か愛里と笑顔で別れたことのある門扉の前に、聖美は立っていた。意を決してインターホンのボタンを押す。三度目に、返事があった。
『・・・はい？』
「あ、すみません、わたし、愛里さんと同じ高校の千秋といいます」
『チアキさん？』
「はい、愛里さんとは中学も同じでした」
『・・・もしかして、愛里がいつも話している聖美さんかしら？』
「はい、そうです！」
『あの、愛里はまだ帰っていませんけど、新体操の部活動じゃないかしら』
「そ、そうですか、」
『あら、でも、聖美さんは新体操部の先輩よね。まさか愛里に何かあったんですか？』
予想外の展開に、聖美の頭はフル回転した。ともかく、愛里は以前通りに新体操の部活をしていることになっているらしい。麗子とのあの日以降、新体操部には来ていないのだから、どこかで時間を過ごして帰宅しているのかもしれない。
いずれにせよ、今にも玄関から飛び出してきそうな愛里の母親に、正直に全てを話す必要は無かった。
「あ、ち、違うんです！　わたしちょっと前に新体操部は辞めていて、近くに寄ったので、愛里さんはどうしてるかなって。今日は新体操部がお休みだって、勘違いしてたみたいです」
『あ、ああ、そうなの。でも愛里は、千秋先輩が誘ってくれたから新体操をやりたいって言っていたのに、残念ね』
「すみません」
『あ、ごめんなさい、いいのよ。せっかく訪ねてくれたのに、申し訳ないわね』
「いいえ、」
来た道を戻りながら、聖美は考えた。ともかく酷(ひど)い人見知りで、大人しい性格の愛里が、

賑(にぎ)やかな場所に足を向けるはずはない。部活の終わる夕刻までの時間を、愛里がひとりでいるとしたら何処だろう。聖美は思い当たる場所を急いで回った。

　聖美がその小さな児童公園の入り口に立ち、愛里の姿を求めて辺りを見回した時には、周囲を赤く染めていた夕陽に、夜の闇が忍び込もうとしていた。木立のせいで、ここからでは公園の全ては見通せない。
　公園の街灯が、まるでそれぞれが気ままに思い付いたかのように灯って、もう遊ぶ子供達もない遊具を照らす。ブランコの、揺れる音がした。
「やっぱり、」
　聖美はブランコのある場所に急いだ。

「あ、あのさ、」
　ブランコに腰掛け、俯いていた早乙女愛里が、ブランコの手前で声を掛けた聖美に視線を向けた。少し跳ねる癖がある前髪を、幼い少女がするような、飾り付きの髪留めでとめている。普段は寂しげで、楽しそうに笑うと無くなってしまう小さな眼から怯えが消えたのは、聖美を聖美と認めたからではなく、自分と同じ制服だからのようだった。
「一年の、早乙女さんだよね」
　愛里が聖美の校章に目を遣る。
「あ、はい。あの、あの、二年生の方ですか？」
「うん、二年Ａ組、千秋聖美だよ。こんな時間にひとりでなんて、どうしたの？　部活動及び認められた校外活動以外の放課後は即時帰宅、が校則だよ」
「あ、あの、い、今帰ろうと思っていたんです、」
「あっはは、冗談だよ。校則なんてどうでもいいよ、命短し恋せよ乙女さ。ひとりっきりで、考え事したい時だってあるもんね」
　聖美は鞄を投げ出し、もうひとつのブランコに飛び乗った。
「あ、あの、あの、先輩は、どうしてわたしを知ってるんですか？」
「だって、名札付けたままじゃん」
　愛里の胸には、校内だけで義務づけられているネームプレートがついたままだった。頬を赤らめて名札をしまう愛里を見詰めながら、もう幾度こうして初めて出会ったのだろうと、聖美は思った。話し出す時「あの」を二回繰り返すのは、中学の頃から変わっていない。
「まあ、余計なお世話だけどさ、随分深刻そうな顔して、なにか悩み事でもあるの？　あ、あたしは新体操部の帰りで、偶然通りかかっただけなんだけどね」
　愛里が聖美から視線を逸らして黙り込む。聖美が期待を込めた、「新体操部」というキーワードは空振りに終わったようだ。
「・・・あの、自分でもよく分からないんです。なんとなく、なんとなくこの公園に来ちゃってて、」
「ふうん、じゃ、午後からずっとここにいたの？」
「え？」
　こんな事を話したら迷惑じゃないかしらと、いつでも気にしているような愛里の、普段

と変わらない口調に聖美の口が滑った。今初めて会った先輩が、愛里の早退を知っているはずはない。
「あ、ごめん、午後じゃなくて、放課後だ。あたしって、お昼食べたらもう放課後だって思っちゃうからさ、」
　慌てる聖美の笑顔に、愛里が微笑む。聖美には、なぜ愛里がこの公園に来てしまったのかが分かっていた。麗子と愛里が、最初に出会ったのがこの公園の、このブランコだったからだ。

　半年くらい前の日曜日、麗子と聖美は、元気に遊ぶ子供達をこのブランコから眺めていた。何を話していたのかは覚えていない。
　聖美達と同じ年頃の少女が、重そうな紙袋を抱えて歩いていた。その少女の目の前で走っていた男の子が転び、手を差し伸べようとしゃがみ込んだ少女も尻餅を付いた。麗子がブランコから腰を浮かせる間に、聖美は駆け寄っていた。
「・・・あれえ、愛里じゃん！」
「千秋先輩？」
　重そうな紙袋には、古書店で買い集めたという不揃(ふぞろ)いな本がぎっしり詰まっていた。麗子に愛里を紹介すると、愛里は緊張気味に挨拶をした。
「あら、その本、」
　紙袋の一番上から表紙を覗かせていた本に、麗子が目を留めた。
「それ、わたしも読んだわ。早乙女さんも、そういうの好きなの？」
「あのあの、わたし、何でも読むのが好きで、」
「そう、読書が好きなのは素晴らしいことだわ。そういう後輩がいたのなら、聖美も少しは見習えばいいのに」
「えー、本読むなんて、教科書だけで手一杯だよ！」
　そうしてしばらくの間、三人で話した。麗子の穏やかな雰囲気に、愛里は珍しく安心した様子で受け答えしていた。そして別れ際(ぎわ)に、麗子が言ったのだ。
「ねえ、早乙女さん、今度新体操部を見学に来てみたら？　歓迎するわ」

　夕暮れの公園で、知らない先輩に親しげに話し掛けられ、困っている愛里の緊張を、聖美はブランコを揺らしながら解いていく。愛里と初めて出会った中学生の頃から、愛里を笑顔にするのが、聖美は嬉しかった。
「だからさあ、あの焼きそばパンは、ぜったいおばちゃんに選ばせちゃダメなんだよ。自分でこれって指差さなきゃ！　けっこう盛りが違うんだよ、盛りが。一年生はまだそういうの知らないから、絶対損してるよ！」
「あの、でも、わたしいつもお昼は家から持っていってますから、」
「ええ、だってお弁当だけじゃ足りないじゃん！」
　ブランコの鎖をギュッと握り締めていた愛里の指が緩み、笑みを浮かべた口元に当てられる。
「あ、ごめん、なんか勝手に好きなこと喋ってるね、あたし、」
「いいえ、あの、なんだか、先輩とお話ししてたら楽しくなってきました」

「そうそう、悩むより慣れろっていうじゃん。人生前向きに生きなきゃ」
「はい。あ、でも、わたしそろそろ帰らないと、」
「うん、そうだね、あたしも帰んなきゃ。部活動後は即帰宅って校則もあるんだった」

聖美は、夜が迫る愛里の家までの道を、ぎりぎりまで連れ立って歩いた。もうひとつ四つ角を折れれば愛里の家という所で、別れを告げる。
「あ、あたしこっちだから、じゃ、また明日ね、早乙女さん」
「あ、あの、先輩、」
「なに？」
「あのあの、今日はすみませんでした。なにかわたしに、付き合わせてしまったみたいで。わたしが、ひとりでぼうっとしてたから、心配してくださったんですよね？」
「そんなカッコよく言わないでよ。同じ制服を着てる仲なんだし、お喋りでお節介なだけさ」
「明日また学校で会えたら、今日みたいに、声を掛けてもらえますか？」
「うん、もちろん！」
静かに喜びを表す愛里に、聖美は精一杯笑顔を作って見せた。でも今日のことも、明日になれば愛里は夢の中に置き忘れて来てしまう。愛里が夢の世界に閉じ籠もってしまってから、幾度もそれを繰り返してきた。
「あ、あの、千秋先輩、」
夢探偵の言う、「現実世界で働きかける」というのは、これでいいのだろうかと考えながら背を向けた聖美を、愛里が呼び止めた。聖美がてて振り返る。
「な、なに？」
「あ、あのあの、」
愛里の小さな瞳が、くりくりと動く。
「あの、『悩むより慣れろ』じゃなくて、『習うより慣れろ』ですよ。それに、『命短し』は、ちょっと古いです」
「あ、そ、そう？　あはは、今度から気を付けるよ」
「あの、千秋先輩、じゃあまた明日」
嬉しそうな微笑みを残して駆け出した愛里が、角を曲がって見えなくなった。
追い掛けて捕まえ、思い出してよと叫びたい衝動を堪える。愛里のためにも、麗子のためにも、必ずあの笑顔を取り戻してみせると、聖美は拳を堅く握った。

第三章　「調査報告」

真木刹那は、体育館へと繋がる渡り廊下を歩いていた。刹那の靴が、大きく響く音を立てる。
「ふうん、ずいぶん立派な体育館だこと。あの子達、ほんとうにお嬢様高校の生徒なのね」
麗子と聖美が夢に見るという体育館は、暗く静まりかえった夢世界の中で、煌々と照らされた照明を辺りに撒き散らしていた。
体育館の扉に手を掛け、扉の窓からこぼれる明るさに眼を細めたところで、刹那は、背

後から渡り廊下を歩いてくる靴音に振り返った。
「誰、麗子さん？」
　麗子はすでに体育館の中で刹那を待っているはずだ。だが、もし靴音の主が、麗子の作り出した傀儡（パペット）の『聖美』なら、バタバタと駆けて来るはずだと刹那は思った。
　漂う闇の中から、『女』が姿を現す。
『・・・あら、おかしいわね？』
「ちよっとあなた、あなたは聖美の方に行ったはずでしょ？」
　暗闇から現れた『真木刹那』を、刹那は睨み付けた。同じように、『刹那』も刹那を睨み返す。
『だから、聖美の居るこの体育館に来たんでしょ、』
「ちょっと待って、ここに居るのは麗子さんよ」
　顔を見合わせたまま腕を組み、互いに右に首を傾げる。
『ねえ、もしかしたら、』
「そうね、体育館の中を確かめた方が早いわね」

　麗子と聖美は、夢探偵を待っていた。夢の中ではいつも、十三メートル四方の競技フロアを現すマットが、体育館の中央に敷かれている。部活ではコーチが座り、部員達に睨みを利かせている場所にパイプ椅子を三つ置いて、麗子はその一つに座っていた。別に申し合わせたわけではなかったが、ふたりとも制服を着ている。
　待ちくたびれて、クラブやリボンで遊び始めた聖美が唇を尖らせて麗子に振り返った。
「ねえ、夢探偵まだかな？」
　スピンを掛けて走らせたフープが、競技フロアの対角線いっぱいを使い切って聖美の掌に吸い込まれる。
「もう、聖美、上履きでマットを踏んじゃだめよ、コーチに叱られるわ」
「あ、ごめん」
　ドンと低く響く音が、体育館の空気を振るわせた。それは勢いよく、体育館の扉が押し開けられた音だった。
『・・・ふたりとも居るようね、』
「そうね」
　いきなり現れた『ふたりの刹那』に、麗子と聖美がギョッとする。ふたりが唖然としている間に、刹那達は互いに競うようにして、体育館の床を踏み鳴らし麗子と聖美に向かって歩いてきた。互いに駆け寄って抱き合い、眼を見開いているふたりの前で立ち止まって、刹那達が依頼者をしげしげと眺める。
『・・・やっぱり、』
「ふたりとも、所有者（オーナー）だわ」
『珍しいわね』
「な、な、なんなんだよ、いったい！　ふ、双子なら双子って、初めから言えばいいだろ！」
　麗子も小刻みに頷いて、聖美に同意を表す。
「あ、ごめんなさい。これは、違うのよ」

「だからさあ、その傀儡(パペット)とか所有者(オーナー)とか、いまいちよくわかんないんだよね」
　麗子と聖美、そして刹那の三人は、パイプ椅子に腰掛け向かい合っていた。刹那の足下には、脱いだ靴が揃えて置かれている。体育館の床板が痛むからと、来賓用のスリッパに履き替えさせられたからだ。麗子が聖美に言った。
「ねえ聖美、つまり所有者(オーナー)っていうのは、現実の世界にも存在するわたし達本人で、パペットは、夢の中でわたし達が作り出す、物語の登場人物みたいなものだと考えればいいのよ」
「その通りよ」
「じゃあ、さっきパッと消えちゃった方の夢探偵は、夢探偵の作ったパペットだったってこと？」
「正確に言うと、わたしの場合は少し違うわ。わたしは自分の意識をどちらにでも移動できるから、どちらがパペットってわけじゃないの。強いて言えば、わたしの意識が入っていない時はそちらがパペット、ということになるかしら」
「ああ、もう！　話をややこしくしないでよ！」
　聖美の膨れっ面に、刹那が楽しそうに微笑む。
「別にあなた達を驚かそうとしてああしたんじゃないのよ。この夢世界の、まったく別の場所にいるだろうあなた達と、同時に話すためにはそうするしかなかったの」
　これには麗子も、眉根を寄せて刹那を見詰め直した。
「あなた達は同じ体育館の夢を見るって言っていたけど、所有者(オーナー)が、この夢世界で別の所有者と接触するのは稀(まれ)な事なの。どんなに頻繁(ひんぱん)に夢で誰かに会うといっても、それはまず間違いなく、その所有者の作り出したパペットなのよ」
「あ、それで刹那さんはふたりに分かれて、わたしと聖美と、別々に会いに来ようとしたんですね？」
「なんでそんな面倒くさいことすんの？　あたしも麗子も、ここに居るじゃん」
「それが不思議なのよ」
「なんで？」
「・・・ねえ聖美、あなたわたしの話をちゃんと聞いてる？」
　麗子が、並んで座っている聖美の腿(もも)をスカートの上からつねった。
「あ、はい、分かります！　要するに、わたしと聖美は、この夢の世界でも本当に会って話していて、それはとても珍しいことなんですよね」
「痛いよ、麗子」
「そうよ。あなた達がわたしを探し当てた時のように、同じ目的の強い想念を同時に持った場合でもなければ、普通はそうなの。でもまあ、なんだかあなた達、わたしが思う以上にいいコンビみたいだから、よほど波長が合うのね」
　麗子と聖美が、互いに見詰め合う。
「そんなことよりさあ、愛里は見付かったの？」
　刹那の脳裏に、あの「光の卵」が過(よ)ぎった。
「・・・あの、刹那さん、刹那さんから現実の世界で早乙女さんに働きかけて欲しいって言われているのに、わたしそれを、ぜんぶ聖美に押し付けてしまっているんです。早乙女さんは、大丈夫なんですか？」

「あ、それは、麗子は地区大会がもうすぐで忙しいし、あたしが勝手にやってるんだよ！　でも、毎日愛里に話し掛けたって、なんにも変わらないよ。毎日毎日、初めましてって言われちゃうんだ。ねえ、早くなんとかしてよ！」
　ふたりの視線をしっかりと受け止めてから、刹那は静かな口調で言った。
「・・・ごめんなさい、早乙女さんは、まだ見付かっていないわ」
「なんだよ、早く見付けてよ！　あんなに偉そうに、引き受けたって言ったじゃん！」
「もう、聖美ったら！」
　聖美をたしなめようとする麗子を、刹那は制した。
「これは言い訳と受け取ってもらっていいけど、夢世界は、人の心のように狭いとも言えるし広いとも言えるの。でも早乙女さんがまだ見付からないのは、確かにわたしの力不足ね」
「えー、それじゃ困るよ！」
「ねえ聖美、あなたも麗子さんも、早乙女さんを取り戻したいのは、彼女を大切だと思うからよね？」
「あたりまえだろ！」
「はい、わたし、早乙女さんが妹みたいに可愛いくて、だから、またいい先輩と後輩に戻りたいんです」
「麗子は、ひとりっ子だからなあ、」
「これもまた言い訳だけど、夢世界での探索には、いろいろなやり方があるの。例えば他人に悪さをするような魂が相手なら、荒っぽい手も使うわ。でも強引な手法は、相手を傷付けないではすまない。夢世界で傷付くのは、体ではなく心よ。あなた達が彼女の事を大切に思うならなおのこと、彼女を傷付けたりしたくないの。だから、もう少し時間をちょうだい」
「でも夢探偵！　このままじゃ愛里が危ないって言ったじゃん！　だから麗子だってお昼が食べられないくらい心配してさ、あたしだって、毎日愛里に会って、そのたんびにあたしは千秋聖美だよって言うの悲しいよ！」
　刹那は、麗子に視線を送った。
「・・・あの、刹那さんが言っているのは、早乙女さんのために一番いい方法をとりたい、だからもう少し待って欲しいって事ですか？」
「そうよ」
　目を伏せ、聖美をどう説き伏せたものかと思案する麗子をよそに、聖美が身を乗り出す。
「ねえ夢探偵、愛里を捜すの、やっぱりあたしも手伝おうか？」
「それは駄目よ！　最初に言ったでしょう、夢世界の事はわたしに任せるのが、あなた達の依頼を引き受ける条件だって」
「でもさあ！」
「だから、謝っているのよ」
「あたし達に謝ったって、愛里が助かる訳じゃないだろ！」
　麗子が、問い掛けるような眼差しを刹那に向けると、刹那の瞳が頷いた。麗子にはそれが、刹那が自分に助けを求めているように思えた。
「ねえ、聖美、刹那さんの言う通り、もう少し待ちましょう」

「だって、麗子！」
「あなたに任せきりで、なにもしていないわたしが言うのは怒るかもしれないけど、刹那さんは、わたし達の気持ちもよく分かってくれていると思うの。刹那さんは夢の世界の専門家なんだから、わたし達には分からなくても、ちゃんと考えがあるのよ。だからもう少し待ちましょう聖美、ね、お願い」
　不満げに唇を尖らせた聖美が、麗子と刹那を交互に見詰める。
「・・・麗子が、そう言うんなら」
「そう、よかったわ。じゃあ、今日のところは他に報告する事も無いし、わたしは退散するわね。次はまた三日後、この体育館ででいいわね？」
　刹那は立ち上がり、ふたりから距離を取った。
「夢探偵、次までには愛里を見付けられる？」
「約束はできないけれど、最大限の努力はするわ。信じてくれる？」
　この場から立ち去るために、指を鳴らそうとした手を止めて、刹那はスリッパのつま先で二度、体育館の床を叩いた。
「ねえ、もう一度訊いてもいい？　あなた達にとって早乙女さんはとても大切で、たとえ辛い思いをしても助けたい、そうよね？」
「はい、そうです！」
「だから、当たり前だよ！　なんで何度も言わせるのさ！」
「ごめんなさい、よくわかったわ。じゃあ、また三日後に」
「ちょっと夢探偵！」
「なに？」
「帰るんなら、自分の靴で帰りなよ。スリッパ返して」
「あ、あらそうね」
　刹那は無言でふたりの所まで戻ると、靴を取り上げスリッパを揃えて置いた。裸足のまま小走りに、またふたりからから離れる。
「じゃあ、また」
　右手の指で靴を摘(つま)んだ刹那は、左の指を何度目かに鳴らして掻き消えた。
「・・・靴、履いて帰ればいいのに」
「そ、そうね」

挿入　「封印の卵・その二」

　早乙女愛里の光の卵は、相変わらずだった。
　刹那の問い掛けに、時には青く光り、時には赤い光を狂ったように走らせる。刹那は黒いワンピースの裾を拡げ、膝を抱いてしゃがみ込んだ。
「・・・まったく、あなたも強情ね、」
　刹那がマジシャンのように二本の指を虚空に突き出すと、何処からともなく現れた煙草が、その指に挟まれていた。刹那の唇が煙草に触れ、その端に火が灯る。深い溜息に吐き出された煙が、重く沈んだこの空間を流れる、時間のように漂った。
　突然、光の卵が眩(まばゆ)い真っ赤な閃光を放つ。

「ちょっ、ちょっと、なに？」
　驚いて振り向いた刹那の表情に気圧(けお)されて、赤い光は萎(しぼ)んでいった。
「あ、煙草が嫌いだったの？　ごめんなさい」
　すでに半分ほどが黒く染まりかけている卵が、控えめに赤く答える。
「あら、じゃあどうして？」
　光の卵は何かを伝えようとして、あちらこちらが青く光ったり赤く光ったりを繰り返した。
「・・・ねえ、そろそろ言葉で、わたしと話してくれてもいいんじゃないかしら？　あなただって赤ん坊じゃないんだから、それじゃあ辛いでしょ？」
　刹那の問い掛けに、しばらく無意味な明滅を続けた光の卵の胸の辺りで、光が意味のある形を取り始める。
『・・・タ・・・タ・・・』
「なに？　あ、カタカナの『タ』ね。ちゃんと読めるわ、その調子よ」
『・・・タ・・・タ・・・バ・・・バ・・・コ・・・』
「煙草？」
『・・・タバコ・・・カラダ・・・ヨクナイ・・・デス・・・』
「あら、もしかしてわたしのことを心配してくれてるの？」
『・・・ハイ・・・』
「ありがとう、でも、今はわたしがあなたを心配しなくちゃならないの。理由は何度も説明したわよね」
『・・・ア・・・アノ・・・』
「構わないでくださいとか、放って置いてとかいうのは無しよ！　わたしは『黒い夢探偵真木刹那』、麗子さんと聖美からの依頼を引き受けているの。これは仕事なのよ、あなたがどう思うかなんて、知ったことではないわ！」
『・・・ア・・・アノ・・・あの・・・』
「なに？」
『・・・なんだか・・・千秋先輩・・・みたい・・・ですね・・・』
「ちょっと、あんな空手娘と一緒にしないでよ」
　光の卵の表面を、幾つもの光が跳ね回った。
「いま笑ったわね？」
『・・・・・・』
「ねえ、あなたのその立派なオブジェに、触れてもいい？」
『・・・・・・』
「よかったわ、悪霊達は、まだあなた自身にまで辿り着いてないのね」
『・・・・・・』
「ねえ、早乙女さん、あなた、今でも麗子さんや聖美のことが大好きなんでしょ？　なのに何が怖くて、こんなところに閉じ籠もっているの？　ふたりがどんな思いでいるのか、ちゃんと聞こえていたでしょう？」
　光の卵が、赤く光ってみせる。
「嘘、ちゃんと合図したでしょ」

　光の卵は、今度は青く光った。
『・・・聞こえて・・・ました・・・』
「だったら、さっさと現実世界に戻って、ふたりと話したらいいんじゃない？　それで万事解決、わたしは報酬を受け取ってさよならよ。いいことずくめじゃない」
『・・・夢探偵・・・さん・・・』
「なによ」
『・・・わざと・・・乱暴な言い方するのも・・・千秋先輩に似てます・・・千秋先輩・・・優しいから・・・』
「あのね、聖美とわたしに似たところがあるとしても、それは聖美がわたしに似ているの、順序を間違えないで。それにね、聖美はあなたが好きみたいだけれど、わたしはあなたみたいなタイプ嫌いよ」
『・・・・・・』
「あなた、とても感受性が豊かで、他人の気持ちをよく理解できるのね。心根が優しくて、素直なのはとてもよいことだわ。でもね、」
　厳しく突き放すような刹那の口調に驚きながらも、光の卵の少女が、その言葉に対して真っ直ぐに耳を傾けているのが刹那には分かった。
「他人を見て、素敵素敵って憧れてるだけじゃ駄目なのよ。麗子さんも聖美も、そしてあなたも、この夢世界であなたが見ている夢の物語じゃない。現実世界で、ひとりひとりの人間として生きているの。互いに関わり合っている以上、ともに幸せを分かち合うこともあれば、相手を傷付けてしまうこともあるわ。そこから逃げてしまうのは心が弱い証拠だし、卑怯よ」
『・・・・・・』
「わたしはね、ちゃんと殴り返してくれる人が好きよ。だってそうじゃなきゃ、喧嘩もできないでしょ？」
『・・・夢探偵さん・・・』
「なに？」
『・・・わたし・・・わたしは・・・駄目なんです・・・そういうの・・・出来ないんです・・・』
「どうして？」
『・・・だって・・・駄目なんです・・・わたし、そういうのどうしようもなく下手くそで・・・わたしのする事なんて・・・ただ麗子先輩を困らせて、迷惑をかけるだけなんです・・・」
「・・・まあ、いきなりキスを迫るのはまずかったわね」
　光の卵が真っ赤に染まる。
「ちょっと、冗談よ。そんなに激しく反応しないで。恥ずかしいのは分かるけど、それって、取り返しが付かないほどの過ちかしら？」
『・・・だって、へ、変です・・・』
「女同士だから？　人間以外に恋をするよりずっとまともじゃない」
『・・・でもでも・・・あんなことしてしまって・・・麗子先輩に、頭のおかしい子だって思われちゃってます・・・』

「あら、本音が顔を出したわね」
『・・・・・・』
「ねえ、早乙女さん。あなたがいちばん怖いのは、あなたのする事であなた自身が傷付くことなんじゃない？　こんな所に閉じ籠もって、麗子さんや聖美が差し伸べている手をはねつけて、あのふたりを失ってもいいの？　何度も言うけど、あなたが夢世界でこんなことをしていたら、悪霊達の餌食(えじき)よ。あなたを喰(く)らい尽(つ)くした悪霊が、次に何をするかわからないわ。たぶん、真っ先に狙うのは麗子さんでしょうね」
『・・・どうなっちゃうんですか・・・』
「言わなければ分からない？　あなたはまず自分自身を失い、その後で麗子さんも危険にさらすことになるわ。大切だと思う人を、二度失うことになる。あなたがしている事は、それほど危険な事なの。いい、現実世界で生きるというのは、自分自身との戦いよ。戦い抜くためには、多少の狡賢(ずるがしこ)さや図々しさだって必要なんだから、もっと図太く、自分の脚でしゃんと立って歩きなさい」
『・・・・・・』
「そうでなくちゃ、あなたは他の人達と一緒に生きていく資格、あのふたりから、あんなにも愛される資格を持てないわよ」
『・・・・・・』
「ちゃんと、聞いてくれてたわよね？」
『・・・はい・・・』
「いいわ。今すぐとは言わないから、自分の力でそこから出てきて、麗子さんと聖美のところに帰ってあげて。でも言って置くけど、そんなに時間は無いわよ」
『・・・はい・・・』

第四章　「麗子と聖美」

「・・・そう、もう少しってところね。大丈夫、早乙女さんは必ず見つけ出すわ、」
　夢世界の体育館、二度目の報告には、刹那はひとりで現れた。
「なんだよ！　また三日も待たせて、まだ見付からないの？」
「次までに必ず見付けるって約束は、しなかったはずよ」
「だってあんた凄腕の夢探偵なんだろ、ぜんぜん評判と違うじゃん！」
　刹那が、じっと聖美を見詰め返す。
「ちょっと聖美、刹那さんに『あんた』なんて失礼よ、」
「ぶー、麗子はすぐそうやって誰にでもいい顔するんだから！　麗子だって、ほんとは怒ってるんだろ！」
「わ、わたしは怒ってなんてないわよ。わたしは、自分では何も出来ないのに、専門家の刹那さんにあれこれ言ってもしょうがないって言ってるだけでしょ、」
「だから、怒ってるんじゃん」
「もう聖美、そんなふうにわたしのことまで勝手に決めないで！　わたしは少しがっかりしてるだけで、怒ってなんかないわ」
「だからがっかりしてるってのは、夢探偵に怒ってるんだろ！」

「だから怒ってないわよ！」
　パイプ椅子を軋(きし)ませて、刹那は脚を組み替えた。
「ふたりともわたしの依頼者なんだから、ケンカするならわたしの居ないところでしてくれないかしら？」
「あ、すみません、」
「なんだよ！　もともと夢探偵が愛里を見付けられないのが悪いんだろ！」
「そうね、ごめんなさい。でも麗子さんも、相手が聖美なら怖い顔もするのね」
　刹那の微笑みに、麗子の両の掌が、赤らんだ頬を覆い隠した。
「怒られついでに聞きたいんだけど、この三日間で現実世界の早乙女さんに変化はあった？」
「無いよ！　昨日も今日もつかまえて話したけど、次の日にはまた『初めまして』だよ！」
「わたしも、何度も廊下で擦れ違ってるんですけど、全然気付いてもらえなくて、」
「やっぱり麗子のことも、知らない先輩って思ってるって事さ！」
「・・・そう、」
「ねえ、夢探偵」
「なに？」
「愛里が見付からないのはさあ、捜すとこ間違ってるからじゃないの？　夢探偵は愛里のこと知らないじゃん、だから愛里が隠れてそうな場所が分かんないんじゃない？」
「・・・あなたなら、この夢世界のどんな場所を捜す？」
　妙案を捻(ひね)り出そうと、こめかみに指を押し当てて俯(うつむ)いた聖美が唸(うな)った。麗子は、聖美の顔を覗き込む。
「そうだ、愛里は本が好きだから、きっと本屋だよ！」
　溜息をついた麗子が、刹那に視線を戻した。
「あ、なるほど、そうね、書店は捜してなかったわ」
「え？　夢の世界にも、本屋さんがあるんですか？」
「もちろんあるわよ。いろいろなのが、たくさんね」
「そ、そうなんですか、」
　刹那はいきなり立ち上がり、麗子と聖美を見下ろしながら、唇の端を引き上げて見せた。
「いいヒントをもらったから、今日はこれで帰るわ。さすが聖美は、愛里さんとの付き合いが長いだけはあるわね。彼女、読書に没頭したりしそうなタイプだものね」
「そうなんだよ！」
「え？　あの、刹那さん？」
「でも聖美、早乙女さんを捜すのはわたしの仕事よ。この夢世界で、自分で本屋を探そうなんて気は起こさないで。それは約束しているはずよね？」
「だから黙って待ってるんだろ！　何遍(なんべん)もうるさく言うくらいなら、さっさと愛里を見付けてよ！」
「そうね。それでも聖美、約束は約束よ」

　翌日、「２Ａ」の三時限目は自習になった。決選投票の末、麗子を僅差(きんさ)で敗(やぶ)った学級委員長が、プリントの束を抱えて教壇に立つ。

「富田林先生は、体調不良のためお休みです。各自、授業終了時間までにこのプリントを提出してください」
　机の列の先頭に配られたプリントが、最後尾まで行き渡った途端、少女達が弾けた。
「・・・ねえねえ、富田林先生、病気なんて嘘らしいわよ」
「奥さんが、逃げちゃったんですって、」
「うそー、男の子が産まれたばっかりじゃない！」
　自席に戻ろうとしていた委員長が、眼鏡に手を掛けて一喝する。
「そこ、自習は静かに！」
「えー、委員長、ほんとは何か知ってるんでしょう？」
　眼鏡のレンズを縁取(ふちど)って、妖しい光がキラリと走った。
「わたしは別になにも。富田林先生と校長先生が、深刻な顔付きで話してるのを目撃しちゃっただけだし、」
「うそうそー！　聞かせて聞かせて！」

　隣り合うクラスの迷惑にならない程度に保たれたを喧噪(けんそう)をよそに、麗子は与えられた課題に取り組む事で、早乙女愛里のことばかり考えてしまう自分を落ち着かせようと務めた。
　そんな麗子の背中を、聖美がつつく。
「もう聖美、お喋りはちゃんとプリントが終わってからにした方がいいわよ」
　振り返らない背中に、聖美は膨れてみせた。
「違うよ麗子、ねえ、この字なんて読むんだっけ？」
「ちょっと、これ数学の問題よ」
「にへへ、やっぱりあたしも、麗子や愛里みたいに、本読んだ方がいいかな？」
「もう、聖美ったら、」
　仕方なく問題文を読んでやり、使う公式を指示すると、聖美がカリカリと式を書き始める。途中で計算が迷子にならないかとその様子を眺めている内に、麗子の心にはまた昨夜の夢探偵の言葉が思い出されていた。
「・・・ねえ、聖美、」
「ちょっと待って、もうちょっと、うん、出来た！」
　顔を上げた聖美を、思い詰めたような麗子の瞳が捉える。
「な、なに？　どうしたの？」
「あ、別に、なんでもないわ」
「愛里のこと考えてたの？」
　目を伏せた麗子が、鼻の先を軽く振って見せた。
「麗子、あたしに嘘つかない！　麗子の嘘はすぐバレるんだから」
「・・・じゃあ、今日お昼休みはまた部室(ぶしつ)に行かない？　そこで話すわ」
「うん、わかった」

「ああ、なんだよこれ！」
　新体操部室の扉を開けた聖美は、散らかった部室(へや)を睨み付け、大袈裟(おおげさ)に嘆いた。
「もう、一年生達ちゃんと片付けてないな！　愛里がいた時はいつもきれいだったのに！」

「早乙女さんは、そういうのも一生懸命だったから、」
　腰に手を当て仁王立ちの聖美が、今は三年生の先輩達に同じ事で叱られ、しょげていたの覚えている麗子は、こみ上げてくる微笑みを噛み殺した。
「まあいいや！」
　豪快(ごうかい)に机の上を片付け、さっさと昼食を広げる聖美に麗子も続く。
「さあ麗子、ちゃんと話して」
「お昼、食べてからでいいわよ」
「駄目だよ、それじゃあ美味しくないもん！」
「・・・そうだけど、」
「だったら話してスッキリする！　美味しく食べてキチンと出す！　それが健康の基本！」
「じゃあ、」
「うん、じゃあ？」
「・・・早乙女さんは、本当に夢の世界の本屋さんになんているのかしら？」
　向き合って見詰め合う二人の真ん中を、何かが通り過ぎでもしたかの間だけ、聖美は黙っていた。
「・・・それなんだけどさ、あたしも考えたんだ。夢探偵には本屋って言っちゃったけど、愛里って気が小っちゃいから立ち読みできないんだよね。図書館って言った方がよかったかな？」
「あの、聖美、違うの、そうじゃなくて、」
「これがさあ、探偵団バッジらしく通信機とかになってたらよかったのに」
　聖美が、スカートのポケットから赤い石のブローチを取り出す。
「こんなの、なんであたし達に持たせたんだろ？」
「そうじゃないの聖美、わたしが言いたいのは、昨日の刹那さんが、何か変だったんじゃないかって事よ」
「相変わらず偉そうだったけど？」
「ううううん、変だったって言うか、たぶんうっかりしてしまったんだと思うんだけど、刹那さん、早乙女さんに会った事があるような口振りだったわ」
「そうだった？」
「そうよ！　早乙女さんのことを『彼女』って呼んだし、読書に没頭しそうなタイプだなんて、納得してたじゃない」
「ちょっと待って麗子、じゃあ本当は愛里はもう見付かってて、夢探偵があたし達に嘘をついてるって、そういう事？　なんでそんなことすんの？」
「それは分からないわ。でももしかして、」
「もしかして？」
「早乙女さんがわたし達の思っているよりずっと危険な状態になっていて、それで刹那さんが、それをわたし達に言えないでいるのかもしれないじゃない。早乙女さんはもう、夢探偵にも助けられないのかもしれないわ」
「ちょっと麗子、」
「聖美、もし早乙女さんがあのままになって、ううううん、もっと取り返しが付かなくなってしまったりしたら、わたしどうしたらいいの？」

「ストップ、ストップ！　麗子ってば、またひとりで後ろ向きに突っ走ってる！」
「だって聖美」
「だってったって、それ全部麗子がそう思ってるだけでしょ？」
「そうだけど、」
「だったら直接夢探偵に聞けばよかったじゃん！」
「え、だって・・・」
「ほらほらもう！　麗子はいつもそうなんだから。確かめてもいないのに、ひとりで考えてひとりで悩まない！　そういうのは無駄って言うか、何だっけ、ほら毛が無い奴、」
「不毛？」
「そう、それだよ！　もし夢探偵が下手な嘘なんてついてたら、あたしがとっちめてやるからさ。だからあたし抜きで考え込まない、それでいい？」
「・・・聖美がそう言うなら、そうする」
「よーし！　じゃ、お昼食べよう！　いっただきまーす！」
　ぱくんぱくんと、聖美が勢いよくお弁当の蓋（ふた）をひっくり返す。
「あー！」
「な、なに？」
「また昨日の晩ご飯の残り物だあ！　まあ、好きだからいいけど、」
「じゃ、じゃあ、わたしのもつまんで。わたしも聖美のお母様のをいただくから」
「やだなあ、家のは『お母様』なんて柄じゃないよ。自分は冷凍食品の魔術師だって自慢する人だもん、麗子のお弁当とは格が違うよ！　煮物とかさあ、どうやったらあんなに美味しくなるの？」
　麗子は、昼食の包みを解いて聖美に差し出した。嬉しそうにいくつか頬張った聖美が言う。
「うん、やっぱり美味しい！　麗子も早く食べなよ、もたもたしてるとあたしが全部食べちゃうよ」
　せわしなく箸を動かす聖美に、麗子は微笑みかけた。
「聖美」
「なに？」
「うううん、なんでもないわ」

　その日の放課後は、新体操部が優先的に体育館を使える順番に当たっていた。舞い上がった埃が西日に煌（きら）めく中で、体育館の中央に敷かれたマットに麗子が立つ。地区大会に向けた、麗子の練習が始まるのだ。
　コーチは定位置のパイプ椅子でレオタードの麗子を睨み付け、部員達は各々床に座り込む。聖美はコーチのすぐ脇に立っていた。
「麗子、いい？」
　コーチの鋭い声に、クラブを手にした麗子が頷いてポーズをとる。
「千秋、始めて」
　麗子のためにコーチが選んだ曲が流れ、左右のクラブで床を打つ動作から麗子の演技が始まった。激しいリズムに乗って、新体操のためには恵まれて伸びやかな麗子の肢体が舞

い跳ねる。クラブは麗子の演技を彩るように、鮮やかに回り飛んだ。ほかの運動部の生徒達までが、練習の手を止めて麗子を見詰めている。
「・・・ぜんぜん駄目だな」
　聖美にだけ聞こえる声で、腕を組んだコーチが呟(つぶや)いた。無難にこなしてるように見えるだけで、麗子の調子が悪いのは聖美にもよく分かった。腕が伸びきってしまっているせいで、手具を操るのではなく追いかけている。高難度のバランスは、形が決まる前に踵(かかと)が床に落ちてしまう。これでは採点競技である新体操で、高得点が望めないのは明らかだった。
　一分半の演技終了を待たずに、コーチは手を二回打ち鳴らした。
「麗子もういいよ！」
　聖美が慌てて曲を止める。競技用マットの上の麗子は、二本のクラブを胸に抱いて叫んだ。
「すみませんコーチ！　もう一度お願いします！」
「駄目駄目、時間の無駄！　他の部員は各自のメニューに戻って！」

　麗子と聖美だけが、体育館の外に連れ出された。体育館と部室棟の間は、駐輪場になっている。その柱に背を持たせ掛け、直立不動の麗子をしばらく見詰めていたコーチの口元がふっと緩む。肩に掛けていたジャージで、麗子を包みながらコーチは言った。
「ここんとこ、あんたおかしいよ麗子。できてた事すらできなくなってるじゃないか」
「・・・すみません」
「すみませんじゃ済まないことくらい、分かってるんだろ？」
「・・・はい、」
「わたしがここを指導して五年になるけど、あんたが一番素質に恵まれた選手なんだ。三年生達も、あんた達の知らない卒業生だってあんたに期待してる」
　コーチは辛抱強く、麗子が頷くまで待ってから聖美に向き直った。
「で、千秋、どうやら早乙女が急に練習に来なくなった事と関係があるみたいだけど、どうなってるんだい？　確か早乙女はあんたの、中学からの後輩だったね」
　自分を見るコーチの眼の厳しさに、なぜ麗子と一緒に呼ばれたのかを聖美は理解した。
「聖美、あんた達が早乙女を可愛がってたのは知ってる。なにがあったか今は聞かないけど、あんたは麗子を応援したいからって、わたしの反対を押し切って競技を止めたんだよね？」
　聖美は返事をしようとしたが、首を縦に振ることしかできなかった。
「自分で言ったことがやれないんだったら、あんたは麗子のライバルでいてくれた方が良かったんだよ。あんた達で解決できないような問題なら、わたしが口を出すしかないよ」
　聖美と一緒に、麗子も頭(かぶり)を振る。
「ほんとあんた達は仲が良いねえ。でもそれが、結果に結び付かないなら意味はないんだよ。ともかくもう時間が無い。麗子には集中してもらわなきゃ困るんだ。わたしは戻るから、今日はふたりとも好きにしていいよ」
　一片の迷いも見せずに、コーチは立ち去った。
「怒られちゃったね、やっぱり、あのオバさん怖いなあ、」

「・・・ごめんなさい、聖美。わたしのせいであなたまで、」
「あー、ほらほら、すぐそうやって他人(ひと)のこと気にするんだから。そんなことしてる暇、今の麗子には無いよ。それより、どうする？　戻る？」
「・・・戻るわ。このジャージ、コーチに返さないと」
「そうだね、そう来なきゃ！」

　聖美の家。出張の父親を欠いた夕食が済み、食器の片付けられたダイニングには、千秋家の女達だけが残っていた。中学生の弟は、呆れる程の量を平らげて部屋に籠もってしまった。小さな智美(ともみ)は、母親の膝の上で寝息を立てている。
「・・・はあ、」
「こら馬鹿長女、お腹いっぱい食べておいて、溜息つくことないでしょ。だいたい溜息っていうのはね、似合う人と似合わない人がいるのよ」
「ねえお母さん」
「なによ」
「変なこと聞くけど怒らないで」
「あんたには中学生までで一生分怒ったから、これ以上は追加料金よ」
「あのね、もし、もしもお母さんが、別の世界に行って帰って来れなくなっちゃったとして、それでね、」
「たとえば、死んじゃったらってこと？」
「うううん、違うの。天国とか、そういうのじゃなくて、一緒に居るんだけど触れないし、声も聞こえないみたいな感じ」
「あたしを幽霊にしたいの？」
「あ、幽霊っていうの近いかも。それでね、お母さんはその世界の何処でも自由に行けるし、何でも好きなことしてていいの。そしたら、お母さんどうしたい？」
　聖美の母親は、柔らかな智美の髪に指を絡ませながら言った。
「それ、時間を遡(さかのぼ)ったりもできるの？　昔に戻ったりできるなら、行ってみたいところはあるけど、」
「え、時間？　時間かあ、それは分からない、聞いてみないと」
「おかしな子ね、聞くって誰によ？」
「あ、あーあー、そ、それはいいから、じゃ一応過去とか未来とかは駄目ってことで」
「それなら、この家に居るでしょうね」
「だって、何処でも好きなところに居ていいんだよ？」
「でもお父さんとあんた達、みんなが揃ってるのはこの家だけでしょ。それに、あたしがいなくなったら、あんたがお父さんと、弟や妹の面倒をちゃんと見てくれるか、見張ってないとならないし」
「え、ええ？」
「ねえ聖美、もしあんたが、自分の居場所みたいなことで悩んでるんなら、自分が心から愛している人の側(そば)が、その人の居場所なんだってお母さんは思う。だからお母さんの居場所はこの家。いずれあんたも誰かと作るのよ、自分の居場所を。それまではこの家にいていいの。いつまでも居られちゃ困るけど、あんまり早く出て行かれちゃうのも寂しいわね」

今の自分よりも少し遠くを眺める母親に、聖美は後ろめたさを感じ慌てて打ち消した。
「あ、違う違う、あの、何か悩んでるとか、そんなんじゃないから」
「そう？」
「うん、変な事言ってごめん」
「お茶飲む？」
「あ、お茶ならわたしが入れるよ、智美が起きちゃうし、」
「そう？」
「ねえお母さん」
「なあに」
「もし昔にも戻れたら、行ってみたいところってどこ？」
「それはあんた達の生まれた日よ、それともうひとつ、」
「もうひとつ？」
「お父さんと、初めて会った日」
母親の胸の中で、智美が小さなくしゃみをした。

「麗子ちゃん、指を叩いてばっかりじゃあ、その問題は解けないよ」
「あ、すみません」
「いいけど、麗子ちゃんが指を叩くのは、怒っている時か、なにか心配事が有る時の癖だから、大丈夫かい？」
自室で机に向かう麗子の脇に立ち、家庭教師の役をしている青年は、麗子の従兄弟だった。
「・・・大丈夫です、裕一郎(ゆういちろう)さん」
コンコンと麗子の部屋の扉が叩かれ、ふたりが同時に返事をする。
「はい」
「ああ、どうぞ」
静かに開いた扉の向こうから、紅茶のティーカップを盆に乗せた麗子の母親が微笑んだ。
「さあさ、ふたりとも、お茶をどうぞ」
「ああ、すみません、伯母さん」
「いいええ、裕一郎さん、家に寄ってもらう度に、麗子さんのお勉強を見てもらって申し訳ないわね。大学生は、忙しいんでしょう？」
差し出された盆から紅茶を受け取りながら、裕一郎は笑った。
「とんでもない、僕の方こそ、懐具合が寂しくなる度に転がり込んで夕飯をご馳走になってるんですから。それに麗子ちゃんは自分で勉強してるんです、僕は横からちょっかいを出してるだけですよ」
「まあ」
「だいたい日本の大学生ってのは、高校生より暇なんですよ、伯母さん」
麗子は、座ったまま自分のティーカップを机の上に移した。
「まあまあ、毬栗(いがぐり)坊主だった裕ちゃんが、ずいぶん楽しくて素敵な青年になったこと」
「ちょ、ちょっと伯母さん、僕が坊主頭だったのは、麗子ちゃんがおむつをしていた頃までじゃないですか」

「そうだったわねえ」
「あ、あのお母さま、もう少しで今日の課題も終わりますから、」
「あら、そうなの」
「はい」
「そう、じゃあ、お邪魔しちゃいけないわねえ」
　麗子の表情を確かめ、もう一度裕一郎に視線を送ってから、麗子の母親は部屋を出ていった。裕一郎は、扉が閉まるのを待ってから言った。
「なにも、追い出さなくたっていいじゃない」
「追い出してなんていません」
「今ので？」
　麗子が、唇を噛む。
「なんだか重症みたいだなあ。よし、じゃあ今日はこれで終わりにして、特別に宿題を出そう」
「・・・宿題ですか？」
「うん、簡単な問題だよ。九百九十九番目の『素数』を答えよ、明日の朝までにね」
「え？　素数って、約数の無い数字ですよね。でも九百九十九番目なんて、」
「使っていいのは紙とペンと、あ、電卓くらいならいいかな。当然インターネット検索なんて不可だよ。まあ手間は掛かるけど、難しくはないよ」
「あ、あの、裕一郎さん？」
「そうだなあ、何か賭けないと面白くないよね」
　裕一郎の眼が、麗子の机の上の写真立てに止まった。
「あ、この子、確かチアキちゃんだっけ？」
　写真に収まった制服姿の麗子と聖美は、同級生の構えたカメラに向かって笑い、微笑んでいた。裕一郎と聖美は、会った事があるのだ。
　ふたりでいるところを、待ち合わせまでの時間を持て余していた裕一郎に偶然出会い、お茶に誘われたことがあった。「千秋です」と名乗った聖美を、祐一郎はそのまま勘違いしたのだ。聖美は、お茶を飲みパフェを食べ、祐一郎に勧められるままケーキをふたつ平らげた。
「あの時は、すみませんでした。聖美が遠慮も無くご馳走になって」
「そんなことないよ、あれくらい気持ちよく食べてくれたら、奢り甲斐があるってもんさ。でもサトミって？　彼女、チアキじゃないの？」
「すみません、彼女は千秋聖美なんです」
「ああ、そうかあ。いくら麗子ちゃんの友達でも、いきなりファーストネームは変だと思ってたんだ。あの子、元気がよくてハッキリしてて、麗子ちゃんにはピッタリの友達だよね。そうだ、もし答えられなかったら、そのサトミちゃんと僕のデートの約束を、麗子ちゃんが取り付けてくれるってのはどう？」
「え？　だ、駄目ですよ、」
「どうして？」
「だって裕一郎さんは、聖美と一度しか会ったことないじゃないですか。それに、そういう事は、聖美の気持ちを確かめてからでないと、」

「一度しか会ったことがないから、もう一度会いたいんじゃない。それとも僕って、麗子ちゃんからの信用が無いのかな？」
「そうじゃないですけど、」
「彼女とは親友なんでしょ？　だったら、従兄弟の素敵なお兄さんを、彼女に売り込んでくれてもいいんじゃないかなあ」
「あの、そういうの困ります」
「・・・なら、なにが何でも今晩中に答えを出すしかないね。ほらほら、さっさとレポート用紙を用意して、たくさん使うよ、なにせ九百九十九番目だからね」
　裕一郎が楽しそうに麗子を急かす。右の本棚の中段に置かれたノートパソコンのプラグを引き抜き、カーテンレールのハンガーから上着を取った裕一郎は、むくれる麗子におどけて見せた。
「じゃあヒントをあげるよ。約数が無いんじゃなくて、何の倍数でもないのが素数だって考えてみたら？　麗子ちゃんなら、すぐ分かると思うけどな」
「裕一郎さん、こんなの横暴です！　裕一郎さんらしくありません」
「可愛い従兄弟を、ちょっと苛めたくなっただけだよ。素数を求める方法を見付けても、後は手作業なんだから、あれこれ考えてる時間は無いよ。頑張らないと、大事な親友を僕が食べちゃうぞ」
「裕一郎さん！」
　麗子の剣幕に、麗子の部屋から廊下に逃げ出した裕一郎は、扉を盾にしながら言った。
「明日の朝までにこいつが鳴らなかったら、麗子ちゃんの負けだからね」
　わざわざ取り出した携帯電話を、裕一郎が振る。麗子は、手の届くところにあった縫いぐるみを掴んで振りかぶった。

　夢の世界、聖家族教会の一室。刹那は長椅子にもたれ、伸ばした指先を見詰めていた。右手の薬指の指輪には、麗子と聖美に渡したブローチと同じ赤い石がはめ込まれている。
「・・・刹那さま」
「なに？」
　キリスト像の声に、首を傾けた刹那の髪が揺れた。
「新しい依頼者なら、今は無理よ」
「そうではありません」
「・・・ねえ、差し出がましいようですがなんて前置きするなら、本当に差し出がましいわよ。今回のわたしのやり方が、気に喰わないんでしょ？」
「いいえ、とても刹那さまらしゅうございますよ。ですが、このままで宜しいものかと、」
「それは、わたしの『夢探偵』としての力量に、不安があるってこと？」
「とんでございません。刹那さまは、最強の夢探偵でらっしゃいますとも」
「でも、ですが、でしょ？」
「・・・早乙女さまとおっしゃいましたか、あの少女が作り上げたオブジェからして、特別に強い想念の力を持っているように見受けられます。そのオブジェに、悪霊達が引き寄せられるまま放置していては、いかに刹那さまといえども危険です。悪霊のひとつひとつなぞ刹那さまの敵ではないですが、多勢に無勢ということになりますと、」

「分かってるわよ」
「分かってらっしゃるのは、それだけではございませんでしょう？　刹那さまは依頼者に嘘を伝えることで、あのおふたりをも危険に晒(さら)してらっしゃいます」
「だから、それにはちゃんと手を打ってるじゃない！」
「あのブローチも問題です。あのように、現実世界にまで影響を及ぼすオブジェを無理に作り出したり維持したりするのは、いかに刹那さまでも」
「責任は、わたしが取るわ！」
「・・・刹那さま、より困難な道を選ばれるのは刹那さまの常ですが、刹那さまの傀儡(パペット)であるわたくしが、刹那さま御自身のことを心配するのは、やはり差し出がましいのでしょうか？」
「そこまでは、言ってないでしょ、」
「刹那さまでも、決して万能ではありません。依頼者にとってよりよい方法をお求めになるのは結構ですが、それも無事に解決できてのことです」
　長椅子の上で、あぐらをかくような姿勢に座り直した刹那が鼻を鳴らす。
「門の上に磔(はりつけ)になって、無理を重ね傷付く刹那さまを見ているしかないわたくしのですね、」
「あ、待って、ほら！」
　突き出された刹那の右手の、薬指の指輪から放たれた光が、渦を巻くように立ち上(のぼ)った。
「依頼者のおふたりのどちらかが、こちらの世界に入ってこられたようですね」
「・・・この感じは、たぶん聖美ね」

「あれ、麗子、まだ起きてるのかなあ？」
　ひとり夢世界の体育館に立つ聖美は、いつも通り制服に上履きだった。明るく照らされた体育館は、声を上げればこだまが帰るほど広い。いつもは麗子が先に来ていて、聖美が来るのを待っている。
「・・・まあ、そのうち来るよね、」
　とりあえず床に腰を下ろしてみる。麗子のいない夢の体育館の床は冷たい。
　クリーム色の競技用マットの一辺は十三メートルよりも長く、四辺を縁取る赤い帯状の部分が場外を表している。その上に、新体操の手具が整然と並べられていた。聖美は、その中からボールを選び、上履きでつついた。
「うわ！」
　競技フロアの中程まで転がったボールが、そこで止まることなく聖美の前に戻ってくる。
「な、なにこれ！」
　驚いて立ち上がった聖美に合わせて、今度は二本のクラブが起きあがり、挨拶でもするかのように左右に振れた。
「わわわ！」
　後ずさりして逃げだそうとする聖美を、飛び跳ねてきたフープが遮る。クルクルと独楽(こま)のように回転するフープに気を取られている隙に、聖美は手具達に取り囲まれていた。

『・・・そうよ、この夢世界は、人間の想念が全てを生み出し、全てを支配しているの』

突然思い出された夢探偵の言葉が、聖美を落ち着かせる。考えてみれば、この夢の体育館は聖美と麗子の想念が作り出した物なのだ。現実世界では有り得ないどんな事が起こっても、それは逆に、今までふたりが夢世界をよく知らなかったから起こらなかっただけなのかもしれない。
聖美が深呼吸をすると、手具達もそれに倣(なら)った。
「・・・もしかして、あたしに使って欲しいの？」
手具達は、千切れるほど尾を振る仔犬のように近寄ってくる。
「まあ、麗子がいないから、ちよっとくらいならいいか。でもこの格好じゃなあ、」
背後から飛んできたボールが、聖美の後頭部を直撃した。
「こら、痛いだろ！　なにするんだよ！」
振り返った聖美は、一瞬の内に麗子が大会で身に付けるコスチュームに着替えていた。
「あ、あれ？」
それも全てが聖美に合わせて仕立て直された、麗子とお揃(そろ)いのコスチュームだ。
「わ、すごい！」
リボンが、聖美の脚にまとわりついてくる。聖美が新体操をやってみたいと思ったのは、テレビで見たリボンの演技に憧れたからだった。
「わかったわかった。でも今日麗子がうまくできてなかったから、クラブからいってみよう！」
差し出した両の掌に、クラブが飛び込んでくる。聖美は競技マットの中央まで行き、ハーフシューズの爪先でマットの感触を確かめてからポーズをとった。
麗子の演技は、すべて覚えている。体育館いっぱいに響く音楽に身を任せて、聖美は手具と自分の身体を操った。軽やかにと思う以上に軽やかに、激しくと望む以上に激しく、あっという間に一分半を踊り切る。
「・・・うわ、やった！　なんだかあたしじゃないみたい！」
クラブをギュッと握り締める聖美の耳に、小さな拍手が聞こえた。
「やだ麗子、来てたの？」
我に返った聖美が、ぐるりと巡らせた視線の先には誰もいない。
「あれ？」
でも確かに、人が手を打つ音だ。耳を澄ませ、音の方向を探る。体育館の出入り口の方と見当を付けた聖美が歩き出すと、手具達が後を追って来た。
か細い拍手は、鳴り止まない。聖美の足が競技マットから一歩出た途端、もとの制服姿に戻った。
「あはは、なんかすごい便利だなあ」
音のする方へ、大股に体育館を縦断する聖美。跳びはね、転がりながら付いてくる手具達。拍手は、間違いなく体育館の扉の向こうからだった。体育館の中が明る過ぎて、扉のガラスには聖美しか映らない。
「もう麗子ったら、隠れて見てるなんてひどいじゃん！」
返事は無く、拍手は続く。
「もう、麗子！」

押し開けた扉の向こう、薄暗がりの中に立っていたのは、聖美と同じ制服の少女だった。胸の校章の金糸は一本。
「・・・あ、愛里？」
「千秋先輩の演技、初めて見ました。すごく素敵ですね！」
拍手の形のまま両の掌を留めて、早乙女愛里はにこやかに微笑んだ。
「ちょ、ちょっと待って、」
「・・・千秋先輩、どうかしたんですか？」
「ど、どうかしたんですかじゃないだろ！　麗子もあたしも、ずっとあんたを捜してたんじゃないか！」
どちらかと言えば小柄な聖美より、もう少し小さな身体を愛里が竦(すく)める。聖美は、愛里に飛びついて抱き締めた。
「もう！　いったい今までどこにいたんだよ！　麗子とふたりで、夢探偵にまで頼んだんだから！」
聖美の腕に身を預けながら、愛里が囁(ささ)くように問い返す。
「・・・夢探偵って、もしかして黒い夢探偵、真木刹那の事ですか？」
「そうだよ！　でもなかなかあんたを見付けてくれなくて、麗子なんかそれで余計に心配しちゃって、もう大変だったんだから！」
「・・・そうですか、すみません」
顔を上げた早乙女愛里の視線が、聖美を捉えた。
「・・・千秋先輩、わたしずっと、千秋先輩と麗子さんのそばにいたんです。麗子さんにあんなことしてしまって、わたしなんか、千秋先輩や麗子さんの迷惑にしかならないですよね？　でも、千秋先輩と麗子さんのそばにいたくて、」
「違う違う！　麗子があんたの気持ちを迷惑だとか、変だとか思ってるってのは誤解だよ！
夢の世界なんかに逃げないで、麗子の話をちゃんと聞いてあげてよ！」
愛里は掌を聖美の胸に当て、ゆっくりと腕を伸ばしながら一歩退いた。
「・・・それなんです、千秋先輩。わたし、あの時は麗子さんに嫌われたと勝手に思い込んで、ただ逃げ出してしまいたくて、この夢世界に閉じ籠もったんです。でも気が付いたらそこは、千秋先輩と麗子さんの夢の体育館と繋がってました。だから時々聞こえるんです、千秋先輩や麗子さんの声が」
聖美の中で、まるで別の意味で言われたはずの母親の言葉と、目の前の愛里が結び付く。
「そうかあ、それだけ愛里は、麗子のことがほんとに好きなんだね。でもだったら、愛里が麗子を好きなんだったら、麗子がどう思ってるか、ちゃんと確かめなきゃ駄目じゃないか！」
「はい、すみません。でも、千秋先輩、」
「ともかくさあ、麗子ももうすぐ来ると思うから、ふたりで待ってようよ。今日分かったんだけどさ、この体育館、面白いんだよ！」
「あ、あの、千秋先輩、」
「あ、愛里がこんなに近くにいたから、夢探偵も愛里を見付けられなかったんだね。でも愛里、会ったこともないのによく夢探偵の名前まで知ってるね？」

「それは、その、黒い夢探偵は有名ですから・・・」
「まあいいや、とにかく愛里も中に入んなよ」
「あの、千秋先輩！」
　手を引く聖美を、愛里は足に力を込めて拒んだ。
「・・・それ、出来ないんです」
「なんで？」
「見て分かりませんか？」
　聖美は、改めて目の前の「早乙女愛里」を見た。愛里だけが、暗闇の中に浮かび上がっている様に見える。体育館の灯りに愛里が照らされているなら、愛里の後ろ、校舎から繋がる渡り廊下も、二段目の端が大きく欠けているコンクリートの階段も見えなければならない。
　自分が闇を踏みしめていることに気付いた聖美は、慌てて扉の内側に飛び退いた。
「な、なんなの、これ！」
「・・・わたし、夢世界に長く留まり過ぎてしまったんです」
「ど、どういうこと？」
「わたしもう、自分だけの力では、千秋先輩や麗子さんの所に戻れないんです。でも、」
「戻れないって、それじゃあ愛里はどうなっちゃうんだよ？　それじゃ麗子だってあたしだって困るよ！」
「・・・でも、もしかしたら、もしかしたらですけど、」
「もしかしたらなにさ！」
　愛里は、頬に掛かる髪に指を絡めながら言った。
「千秋先輩が助けてくれたら、わたし、抜け出せるかもしれません」
「抜け出せるって、どこから？」
「夢探偵から聞いていませんか？　夢世界は、恐ろしい所だって。この夢世界にはたくさんの想念が渦巻いていて、よく考えもしないで逃げ込んだわたしの周りには、弱い心に付け込む悪い想念が、いつの間にか集まって来てしまったんです。もっと早く、千秋先輩と麗子さんのこの体育館まで、勇気を出して来ればよかったんですけど・・・」
「だ、だって、愛里はなんどもここに来たじゃん、泣いてたじゃん！」
「それは、千秋先輩と麗子さんが作ったパペットです。わたしは今日初めて、ここまで来たんです。今日は、千秋先輩ひとりだったから」
「ああ、もう！　だから、麗子は愛里のこと嫌いになったりしてないんだってば！」
「はい。だから千秋先輩、わたしを助けてもらえませんか？」
「・・・助けるって、どうするの？」
「わたしに、付いて来てください。千秋先輩が来てくれたら、わたしきっと、閉じ込められている場所から抜け出せます。千秋先輩は今までも、わたしひとりじゃ見られない世界を、たくさん見せてくれたじゃないですか。わたし、千秋先輩に手を引っ張ってもらえるのが、すごく嬉しかったんです」
「うーん、もう！　今日が夢探偵と会う約束の日ならよかったのに！」
「千秋先輩、夢探偵なんて必要ありませんよ」
「で、でもさあ、」

「そんなに怖がらないでください。大丈夫です。わたしの立っている場所が暗闇に見えるのは、わたしに取り憑いた悪い想念が、千秋先輩の邪魔をしてるだけなんです」
　愛里が上履きのつま先を打つと、確かな音がした。
「ほら、大丈夫でしょう？　わたしの手を握ってください。そうすれば、千秋先輩にも見えてきますよ」
　ゆっくりと差し出された掌に、聖美の指が触れる。愛里は強引に、聖美の手を引き寄せて握り締めた。
「・・・さあ、行きましょう、千秋先輩」
「う、うん、でもほんとに大丈夫？」
「わたし、千秋先輩にだけは嘘をついたことありません。千秋先輩にだけは、嘘なんて言わずにすんだからです。わたしを、信じてください」
「う、うん、わかった、」

　月明かりが照らす夜の校舎中を、ふたりは歩いている。正確に言えば、真夜中の校舎はこんな感じなのだろうと、聖美が思う景色だ。足を止めれば耳鳴りがするほど静かに違いない廊下に、ふたりの靴音だけが響いていた。
「ね、ねえ、愛里、」
　早乙女愛里は、聖美の手を握り、聖美には背を向けたまま歩き続けている。体育館への渡り廊下から第二校舎へ入り、階段を一階分上がった所でまた廊下に出た。一年生の教室が並ぶ二階の廊下を過ぎ、このままでは反対側の階段まで行ってしまう。
「・・・あ、あの、愛里が居る場所って、自分の教室じゃないんだ？」
「あんな所に、わたしの居場所なんてありません」
「じゃ、じゃあ、三階に上がるの？」
「はい」
「だ、第二校舎の三階って、美術資料室とか、科学の実験準備室とかしかないよね？」
「そうです」
「あ、天文学部の部室もあったっけ？　で、でもさ、三階に行くんなら、さっきの階段を上がったほうが早かったんじゃないかな？」
　愛里は、振り返らずに答えた。
「・・・千秋先輩、ここは夢世界です。現実の学校じゃありません。あのまま階段を上ったら、ぜんぜん違う場所に行っちゃいますよ」
「そ、そういうもんなんだ、」
　反対側の階段の前まで来て、愛里が足を止めた。影が差し、聖美からは見えない愛里の横顔が言う。
「この上です」
「あ、あのさ、」
　愛里の靴音が階段を踏む。二段目、三段目と愛里の足音が進むと、手を繋いでいる聖美の腕が伸びきった。
「千秋先輩？」
「う、うん、」

第二校舎の三階も、聖美には夜の校舎にしか見えなかった。冷たく光る廊下が延びて、その先は闇に沈んでいる。
「・・・ねえ、愛里、」
「なんですか？」
先を歩く早乙女愛里が立ち止まった。
「ほんとに、この先に愛里が閉じ込められてるの？」
「・・・もちろん、この先に『早乙女愛里』なんて居ませんよ」
「え？」
聖美の手を握り締めたまま振り返り、愛里は愛らしく微笑んだ。
「もう戻れないから言いますけど、だって『早乙女愛里』が千秋先輩達の体育館に行けるなら、閉じ込められてなんてないってことじゃないですか。彼女は閉じ込められてるんじゃなくて、閉じ籠もってるんですよ。そりぁ多少、わたし達がそれを手助けしてるんですけどね」
「な、なに言ってんの、愛里？」
「だから、わたしは早乙女愛里なんかじゃありませんよ、千秋先輩」
有り得ないほど強い腕力で、『愛里』が聖美を引き寄せる。笑みを漏らす吐息が、聖美の頬にかかる近さで『愛里』は囁(ささ)いた。
「夢の世界で、ひとりで何かしちゃいけないって、黒い夢探偵から言われませんでしたか？」
「・・・あ、あんた、愛里じゃない！」
聖美を抱き締めていた『愛里』の腕が力を増し、聖美の身体を締め上げ自由を奪う。
「そう、夢探偵は、わたし達を『悪霊(デヴィル)』って呼んでいたでしょう？」
聖美は考えるより先に、愛里の姿をした『悪霊』の爪先に右の踵(かかと)を打ち付けていた。緩んだ腕を振り払い、数歩退(ひ)いて身構える。
「じゃ、じゃあ、あんたが愛里を閉じ込めてるんだな！」
ゆらりと揺れただけの悪霊は、愛里の顔に不気味な表情を浮かべた。
「・・・忘れてました。千秋先輩って、空手、強いんですよね？」
普通なら、足の指が砕ける程強く蹴ったはずだ。
「千秋先輩、いまさら抵抗しても手遅れですよ。ここはもうわたし達の夢世界、誰にも手出しはできません。千秋先輩って、邪魔なんですよ。わたし達が本当に欲しいのは、もうひとりの先輩の方です。早乙女愛里を現実世界に繋ぎ止めているのが彼女ですから」
「れ、麗子？　まさか麗子にも何かしようってこと？」
「だから邪魔なんですよ、千秋先輩が。夢世界ではいつもふたり一緒だし、現実世界でも早乙女愛里に付き纏(まと)うし。それで先に、千秋先輩に消えてもらう事にしました」
「麗子に手を出そうなんて、そんなこと許さない！」
「自分の立場が分かってないんですねえ。空手なんていくら強くても、千秋先輩、人間じゃない相手と組み手したことないでしょう？」
聖美を睨み付けながら、悪霊が無造作に足を踏み出す。夜の校舎の空気は凍り付き、足音は聞こえない。摺り足でさがる聖美は、耳の奥で鳴る自分の鼓動で悪霊との間合いを計

った。
　愛里の姿をした悪霊が聖美に飛び掛かる。充分に引き付けてから、聖美は悪霊の腹をめがけて膝を叩き込んだ。
「ぐわ！」
「・・・ねえ、分かったでしょう？　ここは夢世界、あなたなんかに、何もできないんですよ」
　聖美の膝蹴りは空を切っていた。そこにあるはずの悪霊の体をすり抜けたからだ。悪霊の両手が、聖美の首を締め上げている。
「ぐ、は、放せ！」
「放すわけないでしょう」
　悪霊の腕が聖美の身体を吊り上げ、聖美の爪先が床を離れ揺れる。
「・・・知ってます？　夢世界で死ぬと、現実世界でもほんとに死んじゃうんですよ。心と体は、ふたつでひとつなんですから」
　悪霊の腕力と自分の重さで喉を締め付けられている聖美は、声を上げることができなかった。聖美がもがくほど、悪霊の指が食い込んでくる。
「このまま、死んじゃってください、千秋先輩」
　息が出来ない。
「ふふふ、夢探偵の言うことを聞かないから、こういうことになるんですよ。苦しいでしょう？　でも、もうすぐです」
　悪霊の腕を掴んでいた聖美の右手が落ちた。
「・・・さようなら、千秋先輩」
「わたしの依頼者を放しなさい！」

　月明かりの廊下に響いた女の声が、愛里の唇に悪霊が浮かべようとしていた笑みを遮(さえぎ)った。声の主は、聖美を吊り上げている悪霊の背後、教室ふたつ分ほど離れた所に立っている。悪霊は振り返らず、その瞳をギロリと巡らせて答えた。
「・・・まさか、黒い夢探偵さんですか？」
　真木刹那は、こめかみに指を当て、大袈裟に溜息をついて見せた。
「あなたね、恰好を付けて余裕を見せるのはお止めなさい。自分では周到(しゅうとう)に聖美を誘い出したつもりで、本当はわたしが現れた事に驚いているくせに」
　愛里の顔が醜く歪(ゆが)む。
「聖美を放しなさい！　まさかそうやって聖美を捕まえたままで、わたしと戦えるつもりじゃないわよね？」
　悪霊は、獣のように唸ると聖美を投げ捨てた。壁に叩き付けられ、聖美の身体が床に崩れ落ちる。刹那は、聖美の制服の胸が上下するのを確かめてから言った。
「・・・よかったわね、これなら手加減をしてあげられそうよ。さあ、やるなら早乙女さんの姿は解いて本気を出したら？　あなたには似合わないわ」
　刹那に向き直った悪霊が顎をしゃくり上げると、『早乙女愛里』は闇に溶けた。雷雲のように膨れ上がった影が、刹那を威嚇しようと激しくうごめく。
「面白いわ。わたしと戦うにはどんな姿がいいか、考えてるんでしょう？　あなた達に決

まった形なんてないものね」
　低く唸り、闇の中に燐光(リンコウ)を血走らせながら、悪霊は巨人や竜の形を試しては止めた。やがて影が、巨大な狼の姿を取る。
「ああ、それがいいわ、あなたにぴったりよ。それにしても、ずいぶん大きな仔犬ちゃんだこと」
　闇の獣が吠えた。
「ナゼコノ場所ガワカッタ！」
「それはわたしが、最強の夢探偵、真木刹那だからよ」
「嘘ダ！」
「・・・ねえ、あなたわたしとお喋りがしたいんじゃないでしょう？　早くかかってらっしゃいよ」
　悪霊は猛(たけ)り狂い、刹那めがけて突進した。踏み締める足で床を、いからせた肩で壁を、振り上げた尾で天井を破壊しながら刹那に迫る。刹那は後ろに飛び跳ねながら、悪霊の牙に幾度も空を切らせた。
「あら、あなたってこの程度なの？」
　ひらりと床に舞い降りた刹那が笑う。悪霊が渾身の力を込めた一撃を、刹那はその鼻先に突き出した人差し指で受け止めた。
「相手の想念に支配されて、こんなふうに弄ばれるのって楽しくないわよね？　でもあなたが聖美にした事よ。わたしの依頼者を傷付けた報いは、しっかり受けてもらうわ！」
　刹那の瞳の底に、赤い光が差す。刹那が指を突き立てたまま一歩踏み出すと、悪霊の巨体は四本の足を床にめり込ませて仰け反った。
「さあ、選ばせてあげる！　わたしに消(け)されるか自分で消(き)えるか？　自分から消えるなら、ここは見逃してあげてもいいわ。それともわたしに消されて、完全に消滅したい？」
　刹那の力に全身を押さえ付けられた悪霊が呻(うめ)く。血の色をした悪霊の眼が、充分に距離を取ったはずの聖美に視線を移したのを、刹那は見逃さなかった。悪霊が聖美を盾にしようと、巨体を軋(きし)ませ飛ぶ。
「させないわ！」
　いち早く床を蹴った刹那は悪霊の脇をすり抜け、倒れている聖美の前に回り込んだ。聖美を捉えようとする悪霊の巨体と、その力を受け止める刹那がぶつかり合う。悪霊はその身の丈程も弾き返され、牙を折られた口から血を吹き出し悲鳴を上げた。
　刹那はスカートの裾を払いながら、すでに真っ赤に染まった瞳で悪霊を睨み付ける。
「あなた、往生際(おうじょうぎわ)が悪いわよ」
　刹那の腕が虚空に振り上げられた。その指が、悪霊を滅ぼす力を持つシンボルを描き切る前に、悪霊は呪いの言葉を吐き出しながら掻き消えた。

「聖美！　聖美！」
　・・・母親でもなく、麗子でもない、若い女の声が自分を呼んでいる。聖美の瞼(まぶた)は、幾度も瞬きをした。
「・・・夢探偵？」
「そうよ！　わたしが分かる？　どこか痛いところはないの？」

「・・・なんか、体中が痛いよ、」
　薄暗がりの中、自分は廊下の床に横たわり、すぐ脇に膝をついた夢探偵が自分を覗き込み見詰めている。
「聖美、しっかりとわたしを見なさい！」
　刹那の必死な表情に焦点が合った瞬間、聖美は上半身を跳ね起こした。
「あ、わ、あ、あたし、悪霊に襲われて、首締められて！」
　聖美の、あわやの頭突きをひょいとかわした刹那は、制服の襟を両手で握り締め、せわしなく辺りを見回す聖美に言った。
「大丈夫のようね」
　聖美はただただ、変わり果てた校舎の様子に驚いている。刹那の左手が、聖美の頬を強く張った。
「馬鹿！　勝手な事はしないでって、あれほど言ったでしょ！　もしあなたがあのブローチを持っていなかったら、わたしにだってどうすることも出来なかったのよ！」
　息を詰め、目を見開いた聖美の瞳に刹那が写っている。
「・・・夢探偵が、助けてくれたの？」
　ほつれた髪を、刹那が掻き上げた。
「依頼者を守るのも、夢探偵の仕事だって言ったでしょ」
「ゆ、夢探偵！　血が出てるよ！」
　刹那の手の甲に赤い血の筋を見た聖美が、その手首を両手で掴んで強引に引き寄せる。刹那は、目の端で自分の黒衣の右袖が裂けているのを確かめた。
「ああ、あなたの方に飛んだ時に掠(かす)ったのね、油断したわ」
「い、痛くないの？」
　力一杯握り締める聖美の手を、刹那が振り払う。
「そんなにしたら、そっちの方が痛いわよ」
　振り払った掌を、刹那は聖美の頭にそっと乗せた。
「・・・まあ、あなたが無事で、よかったわ」
　刹那の指が、聖美の髪をくしゅくしゅと撫でると、聖美の瞳から涙がこぼれて落ちた。
「ごめんなさい！　ごめんなさい！　ごめんなさい！」
　雪崩のように大声で泣き出した聖美に、刹那が顔をしかめる。
「まるで幼稚園児ね、ほら」
　差し出されたハンカチに、聖美はくしゃくしゃの顔を埋(うず)めて泣きじゃくった。
「・・・よほど怖かったのね。もう大丈夫よ、安心していいわ」
　聖美が幾度も頷く。
「でもこれで分かったでしょう？　夢世界は危険なの。だから夢世界の事はわたしに任せて、いいわね？」
　大きく首を縦に振りながら、聖美は鼻をかんだ。
「ちょっ、ちょっと、ハンカチで鼻かまないでよ」
　聖美の嗚咽(おえつ)が一瞬止まる。
「・・・洗って返す、」
　刹那のハンカチを丸めて右のポケットにねじ込み、聖美は左のポケットから取り出した

ハンカチでまた泣き出した。
「なによあなた、自分のがあるんじゃないの！」
　呆れた刹那の強い口調が、聖美の泣き声のボルテージを上げる。
「ああ、もう、わかった、わかったから。このことは、麗子さんには内緒にしてあげる。こんなこと麗子さん知られたら、あなたまた彼女に叱られちゃうでしょ？」
　うんうんと頷きながら、聖美がまた鼻をかむ。
「ああ、もう！　だからハンカチで鼻かまないの！」
　自分のハンカチから顔を離した聖美は、洪水が止まらぬ瞳で刹那を見詰めた。
「・・・ごめんなさい、」
「もういいわ、聖美」
　ゆっくりと頷いた聖美が、また鼻をかんだ。

「では行ってまいります、お母さま」
　麗子は、いつもより足早に玄関を後にした。通学用の自転車を置いている軒下まで歩き、控え目なあくびを噛み殺すと、鞄の奥からあまり使うことのない携帯電話を取り出した。
「・・・あの、もしもし、」
　庭木の枝に並んだ雀達が首を傾げる。
『あ、麗子ちゃん？』
「七千九百七です」
『え？』
「だから、七千九百七です」
『あ、ああ、昨日の宿題だね。正解だけど、どうやって求めたのかも説明してもらおうかなあ。麗子ちゃんが狡(ずる)してるかもしれないし、』
「狡なんてしてません。奇数を書き出して、三の倍数、五の倍数って消していったんです」
「なんで奇数？」
「だって偶数は二の倍数じゃないですか。二が素数だって事、忘れそうになりましたけど」
『なるほど、「エラトステネスの篩(ふるい)」を、自力で見つけ出したんだね。さすが麗子ちゃんだ』
「でも素数の求め方を考えさせる問題なら、九百九十九番目なんて数字が大き過ぎましたよ。確認するのに時間がかかって、少ししか眠れなかったんですから」
『あはは、それは美容の敵だね。でも麗子ちゃん、昨日より元気そうだよ』
「え？」
『麗子ちゃんは、何かに夢中になったり、ひとつの事に集中してる時がいちばん強いんだよ。でも惜しいなあ、せっかく女子高生の彼女をゲットするチャンスだったのに、』
「もう、裕一郎さん！」
『あ、はい、すみません、今回は僕の負けです』
「ともかく、ちゃんと正解したんですから、聖美とデートは駄目ですよ」
『はいはい。この次は、もう少し難しい問題を用意しておくよ』
「次なんてありません」
　パタンと閉じた携帯電話を顎に押し当てて、麗子は微笑んだ。

挿入　「封印の卵・その三」

「・・・やっぱりね。困った事になったわ」
　愛里の光の卵は、取り憑いた悪霊達に覆われ、見上げる程大きな黒い塊と化していた。
「早乙女さん！」
『・・・モウ、遅イゾ・・・』
「愛里さん、わたしよ！　真木刹那よ！　返事をなさい！」
『・・・モウ聞コエルハズナイワ・・・』
『・・・コイツハ、俺達ガ喰ッチマッタカラ・・・』
「嘘おっしゃい！　あんた達は早乙女さんの力を利用しているだけでしょ！」
　刹那が袖をたくし上げ、手首近くに刻まれた刺青（タトゥー）に触れると、銀色に鈍（にぶ）く輝く鞭がその手に収まった。容赦ない鞭の一閃が、早乙女愛里のオブジェを閉じ込めた悪霊達を切り裂く。千切れ飛んだ悪霊の隙間から、虹色に輝く愛里のオブジェが顔を覗かせた。
「愛里さん！」
『・・・無駄ダ・・・』
「やかましいわよ！」
　刹那がもう一度鞭を振るう。
「あらあなた、誰かと思ったら昨日尻尾を巻いて逃げ出した仔犬ちゃんじゃないの」
『・・・今ハ、俺ヒトリジャナイゾ・・・』
　悪霊達は、互いに増殖しあいながら再び光の卵を覆い隠した。
『・・・オ前ハヒトリダ・・・』
「どうやら、力尽くで早乙女さんを取り戻すしかないようね」
『・・・ヤレルモノナラ・・・』
『・・・ヤッテミナサイヨ・・・』
　銀の鞭を刺青に戻した刹那は、両手を腰にあてがい答えた。
「いい度胸だわね。でも早乙女さんを傷付けるかもしれない以上、依頼者に無断というわけにはいかないわ。次にあなた達の前に立つ時には、この真木刹那を敵にしたことを後悔させてあげる。消滅する前に、後悔する余裕があればだけどね」

第五章　「襲撃」

「聖美、お早う！」
　朝の教室で、昨夜の出来事に項垂（うなだ）れた気分の聖美を出迎えたのは、麗子の満面の笑みだった。
「ねえ、聖美、今日のお昼のおかずはなに？」
「え？　た、たぶん、豚カツだけど、」
「わたしのはね、前にあなたが美味しいって言ってた、甘鯛の煮付けなの。だから、今日の昼休みはあの場所に行って食べない？」
「そ、それはいいけど、」

「いいけど、なに？」
「ねえ麗子、あのブローチ、持ってるよね？」
「え？」
「夢探偵のブローチだよ！　ちゃんと持ってるよね？」
　麗子が、制服の左襟を押さえる。
「だ、大丈夫、あるわよ、ここに、」
「・・・よかった」
　麗子の視線が一瞬自分から逸れた事に、聖美は気付いていないようだった。
「どうしたの？　聖美、今日はなにか変よ」
「変なのは麗子だよ！　朝からお弁当のおかずの話なんて。それに急に、あそこで食べようなんて言うし」
「だ、だってほら、今日は天気がいいから。外で食べたら気持ちがいいかなって、」
「・・・まあ、いいや。今日の麗子、昨日より元気そうだし。そうだね、あそこで食べよう」

　夢世界、聖家族教会（サグラダファミリア）。刹那は大きな姿見の前に立ち、黒い夢探偵の名の由来であるドレスの、背中の結い紐（ひも）を解いた。白い肌を、黒衣が滑り落ちる。
　刹那は、様々な夢のオブジェを想念の力で封じ込め、銀色の刺青（タトゥー）として身体に刻み付けている。多くは攻撃や防御、そして捕縛などに使う物だが、特殊な能力を秘めた危険なオブジェもある。より強力な想念を必要とし、より制御が困難なオブジェほど、身体の中心に近く配置されていた。
「・・・刹那さま」
「あら、イエス様がまた覗き見？」
「刹那さまは戦いの準備をなさる度にその冗談を仰（おっしゃ）いますが、あまり面白いとは思えません。わたくしが、神から使わされたとされるお方の石像の姿なのは、刹那さまがそうなさったからではありませんか」
「だって、門番にはちょうどよかったんだもの」
　唇に浮かべた微笑みとは正反対の険しい眼付きで、刹那はひとつひとつの刺青を、細い指先で触れながら確かめていく。
「なんにせよ、力で押すのなら少しでも早いほうがよろしゅうございます。早乙女さまご自身の力での解決を望まれた、刹那さまの御本意ではないのでしょうが」
「こうなっては仕方ないわ。でも、」
「でも、何でございましょう？」
「気になるの」
「気になるとは？」
「愛里さんに取り憑いた連中のあの余裕よ。彼らがどう束（たば）になったって、わたし以上の力があるとは感じなかったわ」
「何か秘策でもあるのかと？」
「・・・それが、分からないのよ」

四時限目終了のチャイムが鳴るなり、麗子は慌てた様子で、先に行っていてと言い残し教室を出て行ってしまった。
麗子が言ったあの場所とは、ガーデニング部の生徒達が丹誠(たんせい)込める、花壇に囲まれた校庭の一角のことだった。季節ごとに様々な花がほころび、白いベンチが眩しい庭園は、「恋人達の花園」などと呼ばれている。『お嬢様』にあまり縁のない聖美は、その名を聞いた時には鳥肌を立てたのだが、今日のように天気の良い日には、連れだって昼食を楽しみに来る生徒も多い。
「よいしょっと、」
預けられた麗子の分とふたつ、お弁当の包みを抱えて聖美はベンチのひとつに腰を下ろした。聖美から少し離れた場所で、昼食はどうしたのか、制服にエプロンを付けた一年生達が花の世話をしている。なにやら聖美の方を覗き見ては、クスクスと笑っているようだ。
手持ち無沙汰の聖美は、後輩達に声を掛けた。
「・・・お昼休みなのに精が出るね、みんな園芸部？」
いちばん元気の良さそうなひとりが、立ち上がって答える。
「はい。わたし達の庭に来てくださって、有り難うございます。でも先輩、」
よしなさいよと袖を引く同級生を無視して、その一年生は笑って続けた。
「なに？」
「先輩って、お昼、たくさん召し上がるんですね」
「え？　こ、これ？」
「はい」
「こ、これ違うよ、こっちは友達の分だよ！」
聖美が慌てて、麗子の分を膝の上からベンチに置き直した。ほらごらんなさいと、同級生達が立ち上がっている生徒のスカートを叩く。
「あ、そうだったんですか、すみません。おひとりでここにいらっしゃる方はあまりいらっしゃらないので、」
「す、すぐ来るよ、ほんとだよ、」
「すみません。でも先輩、」
「な、なに？」
「わたし達、園芸部じゃなくてガーデニング部です」
「あ、ごめん」

「あ、あった、よかった」
新体操部の部室(ぶしつ)の、自分のロッカーの中に愛用のポーチを見付けた麗子は胸を撫で下ろした。昨日の着替えで制服の襟から外れたブローチを、このポーチに入れたままにしてしまったのだ。
誰が見ているというわけではないのに、なんとなくこっそりとブローチを身に付けた麗子が呟(つぶや)く。
「・・・でも、どうして聖美、急にこのブローチのことを言い出したのかしら、」
麗子の背後で、入口の引き戸が開く音がした。驚いた麗子が振り返る。半分ほど開けられた扉の向こうには誰も居ない。でもその扉の影に誰か立っている、そんな気配がした。

「も、もしかして、聖美？」
　返事は無い。それでも「嘘」をつかれた聖美が、むくれて天井を睨んでいるような気がして、麗子は背で隠すようにしながらロッカーを閉めた。
「あ、あの、こ、これはね、」
　扉の向こうは動かない。
「こ、これは違うの、」
　何が違うのか自分でも分からない麗子が入口の手前に立つと、隠れていた少女が、ゆらりと麗子の前に歩み出た。
「さ、早乙女さん！」

「あ！」
　戦いの準備を終えようとしていた刹那が悲鳴を上げた。
「あ、熱い！」
　袖を通し掛けたドレスが、再び刹那の肩から落ちる。閃光と熱、刹那の右手の指輪が、強烈なエネルギーを発している。
「刹那さま！」
「待って！」
　刹那は左手で、伸ばした右腕の先の、指輪の暴走を食い止めた。封じ込めきれない力が、突風のように刹那の髪をなびかせる。
「刹那さま！」
「大丈夫よ、落ち着いてちょうだい。でもこんなこと、わたしも初めてだわ」
「その指輪は、刹那さまが依頼者のおふたりに渡されたブローチと繋がっています。だとすれば、あのおふたりの身に何か危険が迫っているということになりますが、」
「でもふたりとも眠ってない」
「それはあり得ません。現実世界での危険に、その指輪が反応することはありませんから」
　右手の薬指が引き千切れるほどの苦痛に、刹那の表情が歪む。
「眠ってないのよ！　それに、その現実世界での危険が、悪霊（デヴィル）達の仕業だったとしたら話は別でしょう！」
「悪霊達が、現実世界に作用を及ぼすなど不可能です」
「そうとは言い切れないわ。強力な触媒（しょくばい）があれば、想念を現実世界に逆流させることは不可能じゃない！」
「そ、そういうものなのですか？」
「あの悪霊達は、早乙女さんに取り憑いてる間にその力を身に付けた。たぶん彼女の力を触媒にして、現実世界の早乙女愛里を操れるのよ！　それが彼等の切り札だったんだわ！」
「・・・傀儡（パペット）のわたくしには、理解しかねるお話ですが」
「簡単な話よ！　わたしが手の出せない現実世界で、聖美か麗子さんか、ううううん、間違いなく麗子さんを襲うつもりよ！　それも早乙女さんを使って！」
「は、はあ、」
「はあ、じゃないわよ！」
「・・・では刹那さま、もし悪霊達にそんなことができるとすれば、こちらはどうすれば

よろしいのでしょう？」
「こっちにだって触媒は有るわ！　あのブローチを、聖美と麗子さんが現実世界でも持っていると信じている限り、彼女達のその想念がわたしにとっての触媒になる。現実世界のふたりにコンタクトできるはずよ！」
「あの、刹那さま、もうひとつお伺いしてよろしいでしょうか？」
「なに？」
「その想念の逆流というのは、刹那さまに危険は無いのですか？」
「さあ、やったこと無いから分からないわ」
　暴れ狂う指輪に、刹那は念を込め、持てる想念の力すべてを集中し始めた。刹那の身体から吹き上がる光が、指輪の力と拮抗（きっこう）し、やがて押さえ込む。輝きに包まれ静かに浮かび上がった刹那が、がくんと顎を仰け反らせた。
「刹那さま！」

『・・・聖美・・・麗子さん・・・』
　誰かに呼ばれた様な気がして、聖美は顔を上げた。
『・・・聖美！　・・・麗子さん！　・・・お願い！　返事をして！』
　慌てて辺りを見回しても、せっせと花の世話をする一年生と、各々にお喋りの花を咲かせながら、昼食を楽しんでいる生徒達ばかりだ。
『聖美！　麗子さん！　わたしよ、刹那よ！』
　微（かす）かな声が、自分の制服のポケットから聞こえていることに聖美が気付くのに、少し時間が掛かった。
『聖美！　麗子さん！』
　取り出したブローチが叫ぶ。
『聖美！　麗子さん！　お願いだから返事をして！』
　聖美はブローチに囁いた。
「・・・あ、あの、もしかして夢探偵？」
『聖美！　その声は聖美ね！　麗子さんは？　麗子さんは一緒じゃないの？』
「うわ、すごい！　これ、ほんとに通信機なんだ！」
『馬鹿！　そんなことはどうでもいいの！　麗子さんは、麗子さんは一緒にいるの？』
「・・・あ、あの、こっちはお昼休みで、あたしは麗子を待ってるんだけど、」
『一緒じゃないのね！』
「う、うん」
『聖美！　よく聞いて！』
　突然ボリュームを上げたブローチの声に、周囲の生徒達が聖美に視線を向ける。聖美はブローチを両手で覆い隠しながら、
「ちょ、ちょっと、声が大きいよ」
『馬鹿！　ともかく詳しく説明してる暇はないわ！　聖美、麗子さんが危険なの！　一緒でないのなら、麗子さんは、麗子さんは何処にいるの？』
「あ、あの、」
『分からないなら分からないって言えばいいのよ！」

聖美の唇がへの字に曲がる前に、刹那の声が畳みかけた。
『お願い、聖美、わたしを信じられると思うなら、麗子さんを捜してちょうだい！　今はあなただけが頼りなの！』
聖美がブローチを握る指に、力がこもる。
「うん、わかった！」
『麗子さんは、人気（ひとけ）の無い所に居るはずよ！　誰も見ていない場所で、そこに早乙女さんが行っても誰もおかしいとは思わない場所、そっちの世界に、そんな場所はある？』
「愛里が？　あ、あのさ、こっちは昼休みなんだよ。だから、誰が何処にいてもおかしいってことないし、」
『いいから考えて！』
「あ！　もしかしたら！」
『何処なの！』
「新体操部の部室！　部室棟なら誰もいないよ！」
「走って！」
地面に放り投げられた弁当が、ひしゃげて大きな音を立てた。

恋人達の花園から、体育館裏の部室棟は学園全体の対角線だ。
「ごめんよ！」
「きゃあ！」
聖美は、花の世話にしゃがんでいた後輩達を跳び越えた。
『聖美！』
「黙ってて！」
校庭を斜めに突っ切り、第一校舎に入ろうとした途端、のんびり歩いて来た教師を突き飛ばした。ここから第二校舎への通路を抜けて、もう一度外に飛び出した方が早い。
「すみません！」
「こ、こら！　おまえ、２Ａの千秋だな！」
抱えていたプリントを撒き散らした富田林教諭が怒鳴った。
「外履きで校舎内を走る奴があるか！」
「すみません、急いでるんです！」
「あ、後で職員室に来い！」
「はい、行きます！」
答えた聖美は、すでに連絡通路を駆け抜けていた。

扉が開け放たれた新体操部室に聖美が飛び込む。何が起こっているかを見る前に、聖美は必死に息をした。
「聖美！」
テーブルに押し倒され、制服の女生徒に首を絞められていた麗子が叫んだ。
「愛里！　止めろ！」
麗子にのし掛かった早乙女愛里の襟を掴み引き剥がす。不意を突かれた早乙女愛里の身体が、部室を囲むロッカーに叩き付けられた。

『聖美！　どうなってるの！　説明してちょうだい！』
「聖美！　早乙女さんが、早乙女さんがおかしいの！」
　麗子と愛里の間に立ちふさがった聖美の背に、すがりついた麗子が訴える。
「夢探偵！　あんたが心配した通りになってるみたい！　で、でもこれ、どういうこと？」
　怯えた麗子の指が肩に食い込み、ロッカーに叩き付けられ崩れ落ちた愛里は、床に俯せたままぴくりとも動かない。
『・・・早乙女さんは、悪霊達に操られているのよ』
「え？　刹那さん？」
　聖美が握り締めた拳の中から聞こえる声に、麗子が驚いた。麗子を背に身構え、全身を張りつめた聖美が答える。
「そんなのおかしいよ！　悪霊ってのは、夢の世界に居るんだろ？　あたし達、今は起きてるじゃん！」
『ごめんなさい、それがわたしにも盲点だったの。でも、こうしてわたしとあなたが話してるように、夢世界から現実世界に働きかけることは不可能じゃないのよ！』
　早乙女愛里が、まるで宙に吊られているかのように立ち上がった。壊れたように首を巡らし、瞳孔の開ききった目で聖美と麗子を捉える。
　両腕を伸ばし、ぎくしゃくと歩み寄って来る早乙女愛里に対して、背にした麗子を守りながら、聖美はじりじりと後退した。
「ともかく、どうすりゃいいのさ！」
　ガシャンと、麗子の背中が部室の奥のロッカーに突き当たる。
「聖美！」
『何でもいいから愛里さんを止めて！　愛里さんが意識を失えば、悪霊達が送り込んでいる想念を断ち切れるはずよ！』
　早乙女愛里の両手が、聖美の首をめがけて迫る。
「そんなこと言ったって、相手は愛里だよ！」
『今は違うのよ！　聖美、お願い！』
「愛里！　ごめんよ！」
　鳩尾（みぞおち）に打ち込まれた聖美の拳で、くの字に折れた早乙女愛里の身体が、そのまま垂直に床に落ちた。
「聖美！　聖美！」
「だいじょうぶ、もう大丈夫だよ、麗子」
『麗子さん！　あなたも、あなたも無事ね？』
　聖美の肩に泣き顔を擦りつけていた麗子が、顔を上げて返事をする。
「・・・その声、やっぱり刹那さんですよね？」
『そうよ』
　ブローチを握った聖美の手を掴み、麗子が叫んだ。
「どうして、夢の世界じゃないのに刹那さんと話せるんですか？　それに、なんで早乙女さんがあんな事を！」
『・・・聖美、もうひとつお願いしてもいいかしら、』
「な、なに？」

『・・・わたしの力ももう限界みたいだから、今起こった事を、あなたから麗子さんに説明してあげて。それから・・・』
　ブローチから届く声の音量が落ち、電波の悪いラジオのように不明瞭になった。
『・・・今夜・・・あなたたちの体育館に・・・来て・・・　全部話す・・・わ・・・ごめん・・・なさい・・・』
「ちょ、ちょっと！　夢探偵！　どうしたのさ！」
「刹那さん！」

　聖家族教会（サグラダファミリア）。真木刹那を空中に張り付けていた光が緩むと、刹那は爪先から、ゆっくりと床に舞い降りた。
「刹那さま！」
　ほつれた髪の隙間から覗く唇が微笑む。
「・・・ふたりは無事よ、間に合ったわ・・・」
「刹那さま！」
「この依頼は、今夜決着を付けます。それにしても、『磔』になるって、あんな気分なのね」
　揺らぐ身体を、なんとか保とうとする刹那を支えでもするかのように、キリスト像の声が囁（ささ）いた。
「・・・ともかく、そこのソファにお掛けください」
「そうね、」
「倒れたりなさらないでください。わたくしには、刹那さまの手を取ってさしあげることも、ドレスを肩に掛けてさしあげることも出来ませんから」
　刹那は数歩を必死に歩み、クラシカルなソファーに倒れ込んだ。銀の刺青（タトゥー）に彩（いろど）られた刹那の身体を、ソファーの弾力が包み込む。身体の芯から息を吐き出し、刹那はゆっくりと瞼を閉じた。
「刹那さま」
　返事は無い。
「・・・ご自分で分かっていらっしゃると思いますが、刹那さまは今、持てるお力のすべてを使い切ってしまわれています。すぐにあの悪霊達と対決するなど、無謀です。いかに刹那さまといえども、不死身ではないのですよ」
　声だけで、刹那が答えた。
「それは彼等だって同じはずよ。切り札を破られて、焦っているはずだわ」
「悪霊達はひとりではありません！　それに彼等は早乙女愛里という、特別に強い想念の力を持つ少女を取り込んでしまっています！　今は刹那さまご自身の回復を待つべきです！」
「だから駄目なのよ。急がないと早乙女さんは、悪霊（デヴィル）達に喰い尽くされてしまうわ。そうなったら、聖美と麗子さんも守れない」
「今すぐ戦えば、刹那さまが、刹那さまご自身を守れないかもしれないではないですか！」
「・・・それでもわたしは、黒い夢探偵、真木刹那だわ」
　長い沈黙が、キリスト像の溜息であることは、刹那にもよくわかった。

「・・・わたくしが石像でなければ、せめて温かなお食事をご用意してさしあげることもできるのですが、」
「ううううん、充分よ。ありがとうイエス様、少し眠るわ」
「それがよろしゅうございます」

第六章　「対決」

　聖美が眠りに落ちると、不安げな面持ちの麗子が、体育館の入口で待っていた。
「麗子、夢探偵は？」
「分からないわ。わたし、まだ体育館の中に入ってないから」
「先に来てたんなら、中で待ってたらよかったじゃん」
「・・・だって、」
　麗子が瞳を伏せる仕草に、聖美は即座に反応した。
「あー、また麗子はひとりで考え過ぎてるんだろ？　だから、今日の愛里の事はちゃんと説明したじゃん。あれは愛里がやったんじゃなくて、この夢世界の悪霊のせいなんだってば。それだから夢探偵がこのブローチで知らせてくれて、あたしが間に合ったんだろ。まあ、愛里が貧血で倒れたってのを、保健室の先生が信じてくれたから助かったけど」
「・・・ねえ聖美、」
「なに？」
「ほんとうに、それだけの事なのかしら？」
「なにが？」
　麗子は、胸の前でキュッと指を組み合わせ、聖美を見据えた。
「最後の刹那さんの声は、とても弱々しかったわ。なにか、とても悪いことが起きているんじゃないかしら？」
「・・・だからさあ、夢探偵に呼ばれたんだから、それを直接聞けばいいんだろ？」
「でも刹那さんは『ごめんなさい』って言ったわ、あれはどういう意味？　もしかして、もう早乙女さんを助けられないってことかもしれないじゃない！」
「だあ！　もう！　麗子は勝手に考え過ぎなんだよ、夢探偵がそう言ったわけじゃないだろ！　大丈夫だよ、夢探偵って、もの凄く強いんだから！」
「なによ聖美、あなただって、どうして大丈夫だなんて分かるの？　刹那さんがそう言ったわけじゃないでしょ！」
「だ、あ、あの、分かるもんは分かるんだよ！」
　言い争うふたりの背後で、体育館の扉が開いた。
「・・・ふたり揃っているのに、いつまで待たせるつもり？」
「夢探偵！」
「刹那さん！」
　必死に開けた扉にすがりつくようにして、刹那はふたりを見上げた。
「・・・なによ、靴はちゃんと脱いでいるわよ」
　その刹那の表情に、麗子と聖美が驚く。白い頬に差した紅色は失(う)せ、いつも射るようだった瞳は弱く、震えている。

「夢探偵、どうしたの！　顔色が悪いよ！」
　駆け寄る聖美を、刹那が制した。
「・・・そんなことより、話さなければならないことがたくさんあるの、」

　ふらつく刹那を麗子に任せた聖美は、体育用具室から引きずり出した体操部のマットを、寝台のようにしつらえた。段違い平行棒や平均台から、落下した選手を受け止めるためのものだ。
「・・・椅子でいいわよ、」
「いいから、これに横になりなよ！　これフカフカして、すごく気持ちいいんだよ！」
　聖美の目配せで、麗子は支えていた刹那をマットに導き、そっと寝かせた。横になった刹那の視点に合わせるように、制服の聖美と麗子が床に腰を下ろす。
　刹那が柔らかな感触に身をゆだねている合間に、麗子は聖美をつついて問い正した。
「・・・ねえ聖美、あなたなにか、刹那さんに対する態度が変わってない？」
「え？　そ、そんなことないよ！　だ、だって、夢探偵、体の具合が悪そうだから、」
「ふうん」
　刹那は、マットに片肘を突いて半身を起こすと、もう一方の肩に頬を押しつけた姿勢でふたりを身詰めた。
「・・・あなた達の依頼は、今日、この場で解決します」
「え？」
「な、なに？　どういうことさ、だって肝心の愛里がまだ見つかってないんだろ？」
「ごめんなさい。それはわたしが、あなた達に嘘をついていたの。わたしは夢探偵、早乙女さんがこの夢世界の何処に閉じ籠もってしまったかなんて、すぐに突き止めたわ」
「な、なんだよ、それ！」
「聖美、ちょっと待って。刹那さん、それはどういうことなんですか？」
「早乙女さんは、危険な状態だったわ。彼女の持つ力に、悪霊達が集まり始めていた。でも出来るだけ、早乙女さん自身で現実世界へ、あなた達のところへ帰って欲しかったの。いざとなればいつでも、彼女に取り憑いた悪霊なんて蹴散(けち)らせると思っていたの」
　刹那が言葉を継ごうとする前に、麗子が言った。
「・・・そうでは、なくなったんですね？」
「そうよ」
「ちょ、ちょっと待ってよ！」
「聖美、今日だってあなたがわたしの声に答えてくれなかったら、取り返しのつかないことになっていたのよ。この夢世界は、心の力、想念が全てを支配する世界。でもそうではない現実世界でも、想念は無力ではないの。夢世界の早乙女さんに取り憑いた悪霊達は、現実世界の彼女を操る程の力を持ってしまったわ。わたしですら、あのブローチで繋がっているあなたに、声を届けるのが精一杯だったのに」
　麗子は、幾度か瞬きをしながら刹那の視線に頷いた。
「じゃ、じゃあ、今から悪霊をやっつけるってこと？　でも、夢探偵なんか凄く疲れてるじゃん、大丈夫なの？」
「正直に言うと、大丈夫じゃないわ」

「夢探偵は強いんだから、もっと元気になってから愛里を助けてくれればいいよ！」
　刹那が薄く微笑む。
「・・・そうはいかないんですね？」
「そうよ」
「刹那さん、全部、隠さずに話してください」
「もう、一刻の猶予も無いの。全てわたしが自分を過信して、あなた達や、早乙女さんのためだなんて思い上がったせいだわ。わたしの責任よ、ごめんなさい」
「そんなに謝んなくてもいいけどさ、」
　力無く突いた両手で上半身を立ち上げ、座る姿勢になった刹那は言った。
「・・・ふたりにお願いがあるの、」
「なんですか？」
「なに？」
「依頼者を巻き込むなんて、夢探偵として許されないルール違反なのだけど、わたしを、助けて欲しいの。もちろん、あなた達の安全は保証するわ。でもそれは、わたしの命が続く限りなの」
「い、命の続く限りって、もしかしたら夢探偵が、悪霊と戦って死んじゃうかもしれないってこと？」
「いくら夢世界でも、不滅の生命（いのち）を得ることは出来ないわ」
「・・・刹那さん、わたし達は、何をすればいいんですか？　刹那さんを助けるなんて、わたしにはどうしたらいいか・・・」
「悪霊達と戦うわたしを、見届けて欲しいの。もちろんあなた達のために、わたしの命を触媒にした結界を張るわ。今のわたしには、自分の身を守りながらあの悪霊達と戦うだけの、想念の力が残っていないのよ。あなた達がそばにいてくれて、結界の中から早乙女さんを取り戻したいと強く願ってくれれば、それがわたしの盾になり鎧になるの」
「あ、あのさ、」
「ちょっと待ってください。それじゃあ、まるでわたし達にも、刹那さんと同じ力が有るみたいじゃないですか？」
「もちろんそうよ、ここは夢世界なんだから」
「あ、あの、命をショクバイにするケッカイてのが、よく分かんないんだけど、」
「ただ願っただけで、戦う刹那さんを悪霊から守るなんて、」
　夢探偵は、困惑する麗子から視線を外した。
「・・・どうやら、この夢世界かどんなところか、麗子さんにも納得してもらう必要があるようね」
「いや、だからさ」
「ねえ、聖美。わたし新体操って間近で見たことないの。麗子さんの演技を、今この場で見せてもらえるように、麗子さんに頼んでくれないかしら？」
「え？」
「ちょ、ちょっと待ってください。新体操だなんて、今はそんな場合じゃ！」
「うーん、よく分かんないけど、それって今大事なの？」
「そうよ。聖美、あなたには『貸し』があるはずよね？」

頬を膨らませ、刹那と睨み合っていた聖美が折れた。
「・・・麗子、夢探偵がそう言うんだから、見せてあげたら？」
「なにを言ってるの聖美！　だいたいこんな格好で、演技なんてできるはずないじゃない！」
麗子と聖美は制服姿だ。
「だからさ、ここは夢世界だから、それはなんとかなるんだって、」
「何がどうなるのよ！」
互いに立ち上がってやり合うふたりを眺め、夢探偵は微笑んでいる。
「なによ聖美！　あなた、急に刹那さんの味方になってわたしに新体操の演技をしろなんて、どうかしちゃったんじゃないの！」
「ああもう！　いいから競技マットの真ん中に立ってみなよ！　そうすれば分かるんだから！　麗子がどうすればいいか自分でも分かんなくなっちゃった時は、とりあえずあたしの言った通りにしてみるって、あたし達そういう約束だろ！」
聖美の勢いに、つぐんだ麗子の唇が震える。
「・・・麗子さん、お願い。聖美の言う通りにしてみて、」
四つの瞳に囲まれて、麗子は混乱した怒りの矛先を見失った。
「マットの中央に立てばいいのね！」

美しく背筋を伸ばし、麗子が体育館の中心に立った。
「・・・麗子さんて、綺麗ね」
「そりゃもう、あのコーチが惚れ込んだくらいだから、麗子は最高だよ」
制服のまま首を傾(かし)げた麗子が、聖美に向けて声を張り上げる。
「聖美、何も起きないわ」
「麗子、そこで目を閉じて、今自分が大会の会場にいるって思えばいいんだよ！」
麗子が瞼を強く閉じ、開ける。
「・・・う、嘘、なんなの、これ？」
麗子は、輝く衣装を身に纏った自分に目を見張った。頬に触れ、背中に流れていた髪が結い上げられているのも分かる。
「素敵なメークだわ」
「でしょう？　麗子って、化粧映(ば)えするんだ！」
「さ、聖美？」
「あー、びっくりしなくていいよ。ここは夢世界なんだから、思った事が現実になるんだよ。あたしも最初は驚いたけど、」
「『現実』ではないわ、聖美。言うなれば、人の想念が作り出すビィジョンね」
「だあ、話をややこしくしないでよ！」
深呼吸をした麗子が、コスチュームのずれを直しながら言った。
「・・・刹那さんが、わたしに分からせたかったのはこういうことですか？」
「そうよ。強く願えば、その人の心が形に成っていく、それがこの『夢世界』なの。でも夢の中でも、人間はひとりで生きているんじゃないわ。互いに作用を及ぼし合い、夢の世界は『現実』とも結ばれているのよ」

「・・・今わたしがすべきことは、早乙女さんを助けたいと強く願うことで、聖美と一緒に刹那さんを助ける勇気を持つ、ということなんですね？」
「そうよ、やはりあなたは聡明ね、麗子さん。あなたのその決意が、現実世界をも必ず変えていくわ。『夢』には、その人の想いの力を育てる、揺り籠のような役割もあるから」
　刹那に力強く頷いた麗子は、聖美の方を向き恥ずかしげに肩を抱いて叫んだ。
「聖美、こ、これもういいでしょう？　刹那さんや聖美が伝えたい事は、よく分かったから、」
「・・・あら、あなたの新体操を見せて欲しいというのは、本気で言っているのよ」
「え？」
「そうだよ麗子！　やってみなよ！　絶対麗子のためになるから！」
　刹那は静かに麗子を見詰め、聖美はいつも通り、一生懸命に瞳を輝かせている。
「・・・どの演技を見てもらうの？」
　新体操の「個人総合」は、五つの手具のうち定められた四つで競う。
「そうだなあ、よく知らない人が新体操って言ったら、やっぱりこれじゃない？」
　聖美が指差すと、並べられていた手具の中からリボンの、スティックの部分が跳ね起きた。
「えい！」
　聖美の指の動きに合わせ舞い上がったリボンが、体育館の高い天井が許す空間に弧を描く。麗子はその場所に立ったまま、腕を伸ばしてリボンのスティックを受け取った。
　はらはらと足下に舞い落ちたリボンに、麗子は手慣れた動作で螺旋や波の動きを与える。
「・・・結構、凄い風音がするのね」
「あはは、まるで台風の中継みたいでしょ？　６メートルもあるリボンを床に着けないようにするんだから、見た目よりずっと力技なんだよ。競技中は音楽が流れるから聞こえないけどね」
「ね、ねえ、聖美、曲も無しに踊れないわ、」
「大丈夫だって！　いいから麗子は普段通りにポーズを取ってよ」
　麗子はリボンを巻き上げ右の掌に納めると、渋々ふたりに背を向け、半歩足を踏み出した。
「麗子、始めるよ！」
　聖美が拳を振る。どこからともなく演技開始の合図が鳴り、体育館を振るわす大音響で、リボンの演技用の楽曲が鳴り響いた。
　麗子のリボンの演技は、リボンを高く投げ上げて始まる。
「素敵！」
「頑張れ、麗子！」
　落下地点まで開脚で跳び、リボンを受け止める。再び右手に戻ったリボンが空に大きな円を作り、すぐに鋭い螺旋へと変化する。
「う、嘘、」
　こんなに完璧に、出来たことなど一度もなかった。身体は流れるように次の動作に移り、リボンはその先まで自分の力が行き渡って美しく舞う。戸惑う麗子に、聖美が声を張り上げた。

「そのまま踊って、麗子！　見てもらうんじゃなくて、最高の自分の演技を見せてやるって気持ちで！」
　麗子の表情が変わったのが、刹那にも分かった。
「とても美しいわ」
「でもまだだよ！　リボンの動きが乱れるだろ、あれはリボンが身体に触れちゃってるからなんだ。もっと自信を持てば、麗子はもっともっと出来るんだよ！」
「そうなの？」
「そうさ！」

　一分半、踊り切った麗子が、最後のポーズを決めた。麗子は紅潮した頬を両の掌で包んみ、息を整えるのに必死のようだ。身体を横たえたまま熱い拍手を送っていた刹那が言った。
「ねえ、聖美」
　シンバルのように両手を打ち鳴らし続ける聖美が、刹那を振り返える。
「なに？」
「わたしを麗子さんの所に連れて行って。あなた達の依頼を解決するためには、今麗子さんが立っている場所に行かなければならないの」
　刹那が聖美に、手を差し出した。
「ええ？　自分で立てないの？」
「立てるわよ。でも聖美、あなたに助けて欲しいの」
「・・・しょうがないなあ、」
　聖美の腕に縋(すが)って立ち上がった刹那の鼻を、刹那を抱き支えようとする聖美の髪がくすぐる。
「聖美」
「なに？」
「・・・あなたの髪って、お陽さまの匂いがするのね」
「え？　それ、埃(ほこり)臭いってこと？」
「馬鹿ね、それは干したお布団の匂いでしょ。とても暖かいっていう意味よ」
　麗子は、演技を終えた姿のままでリボンを手に、近付いてくるふたりを待っていた。刹那は麗子の前に立ち、聖美をひょいと突き放して微笑んだ。
「とても素敵だったわ、麗子さん」
「・・・あ、あの、いえ、そんな、」
「なんだか、偉そうなマネージャーの解説付きってのがいただけなかったけどね」
「なんだよ、自分でしっかり立てるんじゃん！　それに偉そうなマネージャーって誰だよ！」
「あら、今ここには、演技していた麗子さんと、それを見ていたわたし以外にひとりしかいないでしょう？」
「なんだよ！　あたしがうるさかったなら、ハッキリそう言えばいいだろ！」
　目の前のふたりの様子が、まるで仲の良い姉妹の様に思えて、麗子は吹き出しそうになる笑みを掌で押さえた。

「・・・あの、刹那さん、」
「なにかしら？」
「聖美がわたしの手具操作に怒っていたのなら、その通りなんですよ。手具はどれでも、聖美の方が上手なんです」
「そうなの？」
「そうです。本当はコーチだって、聖美の方に期待してたんですから」
「麗子！　余計なこと言わなくていいってば！」
「・・・よく分からないわ。聖美が麗子さんより優れていたのなら、聖美も新体操を続ければよかったんじゃないの？」
「・・・あの、本当はそうなんです、」
　伏せられた麗子の瞳が、聖美へと流れる。
「だあ、だあ、だあ！　だからそれは違うんだって！」
「聖美、何が違うの？」
「ああ、もう！　そんなの、あたしと麗子を見れば分かるだろ！　あたしみたいなデブが踊ったって、誰も感動してくれないよ！」
　コスチュームの麗子と制服の聖美の間を、刹那の視線が行き来した。
「・・・聖美、あなた別に太ってなんかいないわよ。どちらかと言えば、麗子さんの方が痩せ過ぎに見えるわ」
「かー！　これだから素人は！　いいかい！　新体操は技術点と芸術点を二で割って、実施点を足して得点を決める採点競技なんだよ！」
「そうなの？」
「そうだよ！　高いレベルで競うにはさ、やっぱり麗子みたいに背が高くて、普通じゃないくらい綺麗じゃなきゃ駄目なんだ。ファッションモデルと同じだよ！」
「・・・ちょっと待って聖美、あなたはそれでいいの？」
「なにが？」
「なにがって、麗子さんとは同い年なんだし、それじゃ悔しいとか思わないの？」
「・・・あのさあ、そんなのは本当の新体操を知らないから言うんだよ。新体操ってさ、競技ってだけじゃなくて、とことんまで突き詰めたら芸術なんだよ、ほんとに！」
「そ、そうなの？」
「そうさ！　だから麗子じゃなきゃ駄目んだよ！」
　刹那は、微笑みながら蒼白い頬を左右に振った。
「分かったわ。やっぱりあなた達って、わたしが思った通りに仲がいいのね。さあ、先に進みましょう。ふたりともわたしから離れて」
　三人は今、競技マットの中央に立っている。
「そう、赤い帯の所くらいまで行って、そっちの方角に。その方が結界を張りやすいわ」
「で、でも、夢探偵、」
「あの、刹那さん、」
「これはあなた達の依頼を解決するために必要な事なの。言った通りにしてもらえないかしら？」

「これでいい？」
「いいわ。今からあなた達の作り出したこの夢の体育館を、わたしの想念で支配させてもらうわね。ふたりは、もっと寄り添ってちょうだい」
　突然制服の姿に戻ったことを驚く麗子と、頷く聖美が互いに肘を抱き合うほどに身を寄せる。
「・・・これでいいですか？」
　刹那の唇が何事かを唱え、指が空に舞うと、刹那はぐらりとよろけた。
「夢探偵！」
「刹那さん！」
　突き出した聖美の掌が、見えない壁に突き当たり、音を立てる。
『・・・結界は張れたようね』
「な、なんだよ、これ！」
『わたしの声が、少し遠く聞こえるかもしれないけど、心配しなくていいわ』
　姿勢を取り直した刹那が、いつの間にか履いていた靴の爪先で床を蹴ると、その一点を中心に競技マットは巻き取られるように消え失せた。床板の上で無理に背筋を伸ばした刹那の、黒いドレスの裾がふわりと舞い降りる。
『早乙女さんは、このすぐ真下にいるわ。夢世界に閉じ籠もっても、あなた達のそばに居たかったのね。これから、あなた達の体育館と彼女のオブジェとの境界を、わたしの力で破ります。それが早乙女さんに取り憑いた悪霊とわたしの、戦闘開始の合図になるわ』
　結界に拳を叩き付け続ける聖美と、立ち竦(すく)む麗子に、意を決した眼差しを向け刹那は言った。
『あなた達、わたしを探し当てたくらいだから、他の夢探偵のことも知っているわよね？
　万が一の時は、ともかくこの夢世界から逃げなさい。そして日下部彰幻に助けを求めて。彼は夢世界の鹿苑寺金閣にいるわ。生臭坊主だから女の依頼者が殺到しているかもしれないけど、わたしの名前を出せばすぐ会ってもらえるはずよ』
「夢探偵！」
「刹那さん！」
　黒い夢探偵はふたりに背を向けた。刹那の想念が支配する夢世界の空間では、刹那の想念の力が大気をも震わす。片膝を付き、刹那が床板に突き付けた掌から拡がった振動が、やがて体育館全体を揺るがし、消えた。
『来るわよ！』
　床板の一枚が、メキっと押し上げられる。一枚、さらに一枚。床板は大波のように天井まで盛り上がり、大音響をあげて弾け飛んだ。千切れた床板が、塵とともに降り注ぐ。
　呆気にとられる麗子と聖美の目の前に、身をかわし飛んだ刹那の背中があった。
『愛里さんは、あの中よ！』

　真っ黒く巨大な卵形の物体が、体育館の真ん中で傾いでいる。よく見ればそれはただ黒いのではなく、無数の闇が嵐の雲のように蠢(うごめ)いているのが分かる。
「あ、あれなんだよ！　夢探偵！」
「せ、刹那さん！」

しばらく刹那と睨み合っていた悪霊達は、自分達が覆い隠している早乙女愛里の光の卵から離れ、各々鎌首をもたげて夢探偵を威嚇(いかく)し始めた。
『・・・モウ、何ヲシテモ無駄ダゾ・・・』
『・・・オマエヒトリデ、オレ達ヲ相手ニスルツモリカ？』
刹那の瞳の底に、赤い輝きが滲(にじ)む。
「わたしに勝てるつもりだった奥の手を潰されて、こうしてわたしの前に引きずり出されているのによく言えるわね。さあ、この真木刹那を敵にしたことを後悔なさい！」
『・・・ソノセイカ？　ズイブン顔色ガ悪イゾ、夢探偵・・・』
『ホント、今ニモ倒レソウジャナイ？』
『オマエガ想念ヲ逆流シテ、アノ娘ニ助ケテモラッタンダロ？　ダッタラ立ッテルノモヤットダヨナア。「アレ」は「力」ガ要ルカラ、』
「やかましいわよ！　自信があるなら、さっさとかかってらっしゃい！」
悪霊達が「光の卵」から離れ、八方から刹那に飛び掛かるまで少し間があった。悪霊達の黒い牙と爪が、刹那に襲いかかる。刹那は背後のふたりを守るように両腕を広げ、それを受けた。
『夢探偵、危ない！』
聖美が叫び、麗子が目を背ける。
悪霊達の攻撃は、刹那のドレスを数ヶ所切り裂いていた。露わになった銀のタトゥーの左肩からは、刹那の血が一筋流れ落ちている。だが、悲鳴とともに消し去られた悪霊の数の方が多かった。
『バ、馬鹿ナ！』
「・・・これで半分は消えたわね」
『オマエジャナイ！　コノ「力」ハ、オマエジャナイ！』
「・・・さあ、どうかしら？」
刹那はわざとらしく横を向き、乱れた髪の隙間から麗子と聖美に微笑みを見せた。結界の中で、聖美が拳を握り締める。
「やった！　やったよ、麗子！」
「さ、聖美、ど、どういうこと？　あ、あの気味の悪い化け物が、悪霊なの？」
「そうだよ！　だから今はあたし達が、夢探偵を守るんだよ！　そうしなけりゃ、愛里をあいつらから取り返せないんだ！」
『何処ダ！』
静観する刹那を無視して、悪霊達が暴れ狂う。
『何処ニイル！』
『出テコイ！　弱リキッタ夢探偵ニ手ヲ貸シテモ無駄ダゾ！』
『全部喰イ殺シテヤル！』
「うるさいぞ、悪霊め！　おまえ達なんかに、夢探偵が負けるわけないだろ！」
「・・・ね、ねえ聖美、もしかしてあの化け物達には、わたし達が見えてないのかしら？」
「あ、うん？　そういえば、そんな感じだよね？」
「刹那さんが張った『結界』が、わたし達を守っているってこと？」
「・・・唸り散らしても無駄よ。奥の手っていうのはね、こういうふうに使うものなの。

さあ、もう一度あなた達から来る？　来ないなら、こっちから行くわよ！」
　銀のタトゥーを鞭に変え、刹那が飛んだ。再び光の卵に巻き付いた悪霊達が身構える。
「無駄だって言ってるでしょ！」
　刹那の鞭で、さらに数匹の悪霊が消し飛んだ。その反動を巧みに利用し着地した刹那の手に、クルクルと輪を描いて鞭が戻る。
「あなた達が選べる道はふたつよ。わたしと戦って消滅するか、早乙女さんを諦めてわたしの目の前から消えるか、さあ、どうするの！」
　光の卵を覆っていた黒いうねりが八方に散る。悪霊達は、刹那との対決を選んだ。虹色に光る早乙女愛里のオブジェが、その姿を現す。
「・・・あれが、早乙女さんの、」
「愛里は、あの中なんだよ、きっと！」
『・・・オレ達ヲ消スダッテ？』
『オマエニ、ソンナ「力」ハ無イハズダ！』
「愚かな選択だわね！」
　体育館いっぱいに拡がった悪霊達が、握り潰すかのように刹那に迫る。刹那は臆せず切り込んだ。刹那の鞭が唸り、悪霊を消し飛ばす。懐まで飛び込んできた敵を、刹那は別のタトゥーのナイフで貫いた。麗子と聖美の想念が、刹那をその輝きで守っている。
　だが攻撃に集中する刹那の背後に、悪霊は回り込み始めた。死角から襲う悪霊の牙に、聖美が叫ぶ。
「夢探偵！」
　瓦礫の中に散らばった、新体操のリボンがそれに答えた。美しく舞うはずのリボンが、悪霊を捉え動きを封じる。それに気付いた刹那は、新たなタトゥーを武器に変え、振り向く事なく悪霊を消し去った。激しい戦いの隙を縫って、刹那が肩越しに二本の指を立てて見せる。
「凄い！　凄いよ麗子！」
「・・・聖美、今の、あなたがしたの？」
「そうさ！　あたしにも麗子にも出来るんだよ！　愛里をあいつらから取り戻そうよ！」
『嘘ダ！』
『コンナコト有リ得ナイ！』
『ドコ！　何処ニイルノ！　コノ女ニ手ヲ貸シテル想念ノ主ハ！」
「それは『あの世』で考えなさい！」
　無防備に戦う刹那を、新体操の手具達が助ける。麗子の小さな悲鳴で、フープが悪霊の足下（あしもと）をすくい、聖美のクラブが悪霊達を打ち据える。刹那は、ひとつひとつ確実に、悪霊達を倒していった。

「・・・あら、あなたが残ったの？」
　虹色に輝く早乙女愛里のオブジェを背に、『狼』の姿をした暗闇が低く唸り声を上げている。
『・・・呼吸ガ荒イゾ、夢探偵。モウ限界ジャナイノカ？』
　黒い夢探偵は、蒼白い頬に微笑みを浮かべた。

「・・・否定はしないわ、確かにそうだわね。でも問題は、あなたを滅ぼす一撃が、今のわたしに残っているかどうかでしょ？」
『・・・夢探偵、何故ソウマデシテ俺タチト闘ワナケレバナラナインダ？　コノ夢世界デシカ生キラレナイノハ、オマエダッテ同ジダロウ？』
「余計なお世話ね。わたしは夢探偵、夢のオブジェと引き替えに、依頼者の夢世界でのトラブルを解決する、それだけだわ」
『ソレガ何ンニナル？』
「・・・あなたってほんとお喋りが好きね。逃げ出す隙を狙っているのなら無駄よ。この前と違って、この空間を支配しているのはわたしの想念。それに、今ひとりなのはあなたの方だわ！」
　闇の狼が吠える。刹那の瞳が真っ赤に染まり、夢探偵は悪霊の突進に真っ向から立ち向かった。刹那の指が、深紅の魔法陣を描く。
『夢探偵！　死ネ！』
「お喋りな『男』って、好みじゃないの！」
　力と力の強引な激突の後に、残ったのは傷だらけの刹那だった。

第七章　「暴走」

「夢探偵！」
　結界の壁に叩き付けた、聖美の拳が空を切る。
「刹那さん！」
　結界は解けていた。崩れ落ちた体育館の中を駆け寄ったふたりの腕に身をゆだね、刹那は言った。
「・・・さあ、愛里さんはこのオブジェの中よ。きっと、あなた達の言葉を待ってる。早く、伝えてあげて、」
「だって、夢探偵！」
「刹那さん！」
「・・・わたしは大丈夫、あなた達が、守ってくれたから。あなた達の依頼は、愛里さんを助けて欲しいって事じゃなかったかしら？」
　悪霊達から注ぎ込まれていた想念を失った『光の卵』は、蹲（うずくま）った少女を包むにふさわしい大きさになっていた。キラキラと輝く七色の光は、オブジェの主である「早乙女愛里」そのものだった。
　刹那が、支えられながら聖美を見詰める。聖美は、頷いてオブジェに向かい声を張り上げた。
「愛里！」
　光の卵の、輝きが震える。
「愛里、いったい何やってんだよ！　愛里が麗子を好きなら、それでいいじゃん！　麗子だって、愛里のこと妹ができたみたいで嬉しいって、いつも言ってたんだから！　ちっちゃなことで勝手にくよくよするなって、ずっと言ってるだろ！」
　刹那は麗子に視線を移し、微笑んで頷いた。

「早乙女さん！　お願い、聞いて！　あの時はわたし、ただ驚いてしまっただけなの！　あなたがわたしを好きになってくれたこと、とっても嬉しいのよ」
「愛里！　いいから麗子とあたしと、三人でちゃんと話そうよ！　そんなとこにひとりで閉じ籠もったって、何にもならないだろ！」
「早乙女さん、わたしもあなたが好きなの！　でも！」
　『光の卵』は、沈黙している。
「・・・ねえ、ふたりとも。もっと肝心な事を説明しないと、早乙女さんの『誤解』は解けないと思うわよ」
　切り裂かれた黒衣を身に引き寄せて、刹那は自分の脚で立った。
「ハッキリ言ってあげたら？　愛里さんは、女の子が女の子を好きになったってことが、変だと思い込んでいるのよ。あなた達も、その気持ちを受け入れられるはずがないって、決めつけてるの。だからちゃんと話してあげて。でも気を付けてね、分かっているでしょうけど、彼女、ナイーブだから」
　ハッとして刹那を見詰めた麗子に、刹那はウィンクを返した。
「ああ！　もう！　いいからそこから出て来いってば！」
　自由になった聖美が『光の卵』に飛び付き、激しく揺さぶる。
「聖美！」
「馬鹿！　駄目よ！」
　眩い光が、聖美を弾き飛ばした。「早乙女愛里のオブジェ」を形作っている光の帯がうねり始め、所々に赤い閃光を発する。
「刹那さん！」
「まずいわ！」
　悪霊達に破壊され、捲(めく)れ上がった床板の上に突き飛ばされた形の聖美を、刹那は睨み付けた。
「早乙女さんが一生懸命心を落ち着かせようとしてたのに、何てことするの！　彼女の事をいちばん分かっているのは、あなたのはずじゃないの！」
　聖美が、上半身を起こす。
「痛ったた、だって！」
「刹那さん！　何が起こっているんですか？」
「何度も言ってるでしょ！　夢世界は想念が支配する世界、人間の心が、何でも作り出すの！　このままだと、愛里さんの想念が暴走するわ！」
「ぼ、暴走って、なんだよ？」
「聖美！　わたしの手を掴みなさい！」
　背を反らし、無理に聖美に向かって腕を伸ばすと、まだ側に寄り添っていた麗子の腰を抱いた刹那が、封印の卵から飛び退いた。
　腕だけを掴まれて飛ばれた聖美が尻餅をつく。
「痛い！」
「痛いじゃないわよ！　あれを見てご覧なさい！」
　小さく美しく、「卵」を形作っていた光の帯が、激しく脈打ちうねっている。それは巨大なエネルギーが噴き出そうとしているようでもあり、必死にそれを押さえ込んでいるか

のようにも見えた。
「愛里さん、駄目よ！　あなたの『力』を自分の殻に押し込めても何も解決しないわ！　お願いだから麗子さんと聖美の話を聞いて！」
「愛里！」
「早乙女さん！」
　光の帯が、ギュッと引き締まる。
「あれ、もっと小ちゃくなったよ？」
「馬鹿！」
　早乙女愛里の、「光の卵」が破裂した。
　巻き付いていた光の帯が反転し、竜巻のように膨れ上がる。体育館の天井に達した渦巻きが揺れながら、刹那と悪霊の死闘で破壊された瓦礫（がれき）を巻き上げ始めた。
「わ、わわ！」
「さ、聖美！」
「ふたりとも！　ともかく逃げなさい！　あんなのに巻き込まれたら、ひとたまりもないわ！」
「に、逃げるって、ど、どうするの！」
「飛べないなら走りなさい！」

「わ！　こっちに来る！」
「さ、聖美！」
「早く逃げなさいってば！」
　早乙女愛里の想念の渦が、体育館のあちこちにぶつかっては、壁も床も喰い千切りながら移動し始めた。
「わ、わわわ！　麗子！」
　聖美の右手が麗子の手首をしっかりと掴むのを確かめてから、刹那は暴れ狂う「早乙女愛里」の後ろ側に飛んだ。
　必死に逃げ回るふたりを、想念の竜巻が追い回す。
「駄目！　今のわたしの力じゃ、やっぱり止められない！」
「きゃ！」
　躓（つまず）いて倒れた麗子を、聖美が慌てて抱き寄せた。麗子の足元を、『竜巻』が抉（えぐ）りながら通り過ぎる。
「走って逃げろったって、そんなの無理だよ！」
「でもそれしかないのよ！　悪霊達と戦うためにこの空間は封印（ロック）してあるから、外には出られないの！」
「さ、聖美！　また来るわ！」
　四方の壁を舐めるように進む竜巻を避け、ふたりは体育用具室に滑り込んだ。直後に用具室の扉が引き千切られる。
　激しい想念の渦の合間を縫って、刹那はふたりの前へと跳び戻った。刹那の背中に、麗子と聖美が叫ぶ。
「せ、刹那さん！　さ、早乙女さんは、どうなってしまったんですか！」

「夢探偵！　なんとかしてよ！」
　刹那も振り返って叫んだ。
「ああ、もう！　彼女は一時的に自分でも自分の心が制御できなくなってるの！　要するに『ヒステリー状態』なのよ！　聖美！　あなたが乱暴な事をするからこうなったのよ！
　想念が支配するこの夢世界で、人の心が暴走したらこうなるの！　どうしてくれるのよ！」
　刹那の剣幕に、聖美の表情がクシャっと歪む。
「・・・ごめんなさい」
「まさか愛里さんを、『攻撃』するわけにはいかないし・・・」
「刹那さん！　何か方法はないんですか？　わたし、何でもしますから！」
　早乙女愛里の『想念』が向きを変え、刹那達の用具室に向かって来た。すでに半分ほども吹き飛んでいる空間に、次は無い。
「・・・しかたがないわ、『ドリーム・ジャック』を使ってみる！」
「わ、なにそれ！」
　刹那は聖美を睨み付けた。
「手に入れてから、一度も使ったことの無い『オブジェ』よ。理論的には、対象者の夢を乗っ取れるはずなの！」
「乗っ取るって、どうなるんですか？」
「わたしが愛里さんの『オブジェ』に入り込むのよ。わたしと彼女の想念を混じり合わせるの。でももしわたしが彼女を止められなかったら、あなた達を守るどころの話じゃないわ！　愛里さんの想念に飲み込まれて、わたしもあなた達も消えるのよ！」
　麗子が、髪を掻き上げた。
「・・・わたし達は、なにをすればいいんですか？」
「祈っていなさい」
　左の膝に押し当てた指を擦り上げ、刹那は内腿（うちもも）に刻んだ銀のタトゥーを発動させた。

　うねり輝く光の中で、小柄な少女が両手で顔を覆い肩を震わせている。
「・・・早乙女さん、」
　少女は、背筋を仰け反らせるほど驚いた。
「たくさん話したけど、こうして会うのは初めてね。真木刹那よ」
　早乙女愛里は、壊れたように首を振って刹那を拒絶する。
「聞いて。あなたの乱れた心が、あなたのオブジェを暴れさせて大変なことになっているの。このままだと、麗子さんと聖美の命も危ないわ。お願いだから、わたしの方を向いて話を聞いて、」
　刹那は、早乙女愛里に一歩歩み寄った。刹那が踏み締める光の帯が延び、刹那を遠ざける。
「そう来ると思ってたわ。でも今はもう、それに付き合っている暇は無いの！」
　波となって押し寄せる光の帯の「頂点」を跳び跳ね、刹那が「少女」を抱き止めた。
「ほら捕まえた！」
　背後から抱き締められた少女が激しく抵抗する。

「無駄よ！　もうあなたの『想念の力』でわたしを拒むことはできないわ！　腕力の勝負なら、あなたなんかに負けないんだから！」
　刹那は強引に、早乙女愛里を自分に向き直させた。早乙女愛里は刹那の胸を拳で打ち、刹那が握り締める制服が解(ほつれ)れるのもかまわず暴れる。
「駄目と言ったら駄目よ！　あなたは、勘違いをしてるの！　麗子さんがあなたを拒んだ理由は、あなたが思っているようなことじゃない！　麗子さんも聖美も、あなたを否定なんてしてないのよ！」
『嘘！』
「嘘じゃない！　どんなに他人を思い遣って、思慮深く振る舞おうとしても限界があるのよ！　誰が何を思ってるかなんて、分かるわけないじゃないの！　あなたは『他人』まで自分の『殻』に押し込めて、『自分』を守ろうとしているだけだわ！」
『違う！』
「違わない！　間違っているのはあなたよ！　わたしの話を聞く気があるのなら、わたしを見なさい！　それともこのまま麗子さんや聖美を消し去ってしまうつもりなの？　今自分が何をしてるか、それが分からないわけじゃないでしょう！」
　大きく見開かれた瞳が、刹那を見詰める。刹那が、溜息をついた。
「・・・ああ、愛里さん、あなたとても可愛いのね。麗子さんと聖美が、あなたを可愛くて仕方のない気持ち、よくわかるわ」

　『竜巻』が暴走を止めた。
「・・・と、止まったよ、」
「聖美、どうなったのか分からないんだから安心しないで。わたし達がどうすればいいか、まだ分からないわ！」
「う、うん、」

　潤んで輝く早乙女愛里の瞳から、あふれる涙がこぼれ落ちては頬を伝う。
「・・・でも駄目なんです、わたし。わたしなんて、新体操に打ち込んでる麗子先輩の邪魔をして、それで結局、中学の時と同じ様に千秋先輩にも迷惑を掛けて。わたしなんて、居ない方がいいんです！」
「麗子さんか聖美が、そう言ったの？」
　瞬きをせず、愛里が小さく首を振る。
「だったら、やっぱり間違っているのはあなたよ、」
　乱れて頬に張り付いた早乙女愛里の前髪を、刹那の指が優しく梳(す)き上げた。
「・・・愛里さん、あなたの『心』は未熟だわ。でもそれは、麗子さんや聖美だってそうなの。この『夢世界』に逃げ込む前に、あなた達には『現実世界』でしなければならないことがまだたくさんある。ねえ、わたしの言っていることが理解できる？　あなたが今、何をしなければいけないのかも」
　『光の卵』が赤く光った時と同じように、早乙女愛里がまた首を振る。
「でしょうね。でもあなたは、あのふたりに愛されてる。あなたは、麗子さんと聖美の所に帰るべきよ」

「・・・だ、駄目です！　わたし、麗子先輩が好きで、その気持ちを抑えられなくて、また麗子先輩にも千秋先輩にも迷惑掛けちゃいます！　そんなの駄目です！」
「だから、麗子さんや聖美がそう言ったの？　あなたの気持ちが迷惑だって！」
「そ、そんなの、迷惑に決まってます！」
　刹那は、愛里の顎を掴んで睨み付けた。
「もう！　小さくて可愛らしいのにうるさい唇ね！　黙らせてあげるわ！」
　驚く間もなく重ねられた刹那の唇に、早乙女愛里の全身を衝撃が貫く。「驚き」で愛里が刹那を突き飛ばしてしまわないよう、愛里を抱き竦(すく)める腕に刹那は力を込めた。
「・・・何も感じない？」
　抱き締めた少女の緊張が、緩やかに解けていく確かめて、刹那は早乙女愛里の頬に囁(ささ)いた。
「・・・わたしは、『あなた』を感じるわ」
　何かを言おうとして、早乙女愛里が自由になった唇を震わせる。
「無理しなくていいのよ。ただ『わたし』を感じてくれればいいの。人と人が触れ合うのは自然なこと。それとも女同士だから、わたしもあなたも何かを感じるのは『おかしい』のかしら？」
　擦り寄せた頬で、刹那は早乙女愛里に微笑みを伝えた。
「・・・目を閉じてくれないと、キスがしづらいわ。一緒に帰りましょう。あなたが居るべき場所、麗子さんと聖美の所に」
　再び重ねられた唇に、愛里は瞼を閉じ、その身を委(ゆだ)ねて応じた。

　暴れ狂うように回転していた光の竜巻が、ゆっくりと動きを止める。煌(きら)めく光の帯はクルリと反転を解き、巨大な「光の卵」にその形を戻した。
「れ、麗子！」
　麗子は聖美に頷いた。
「きっと、刹那さんが早乙女さんを落ち着かせてくれたんだわ！」
　崩壊した体育用具室から、麗子と聖美が這い出る。瓦礫(がれき)を掻き分け、恐る恐る近付く麗子と聖美の前で、光の卵は色褪せ、萎(しお)れる花のように音もなく崩れ落ちた。刹那と早乙女愛里が、姿を現す。
「あー！」

「な、なにやってんだよ！　夢探偵！」
　麗子が両の掌で顔を覆った。早乙女愛里は、慌てて刹那の背に身を隠す。
「こ、これは、その、い、行きがかりよ、行きがかり！」
「行きがかりってなんだよ！」
　刹那は騒ぐ聖美を無視して、麗子を見詰めた。
「・・・麗子さん、あなたの依頼通りに、この「夢世界」の呪縛からは早乙女さんを解き放ったわ。あなたの前にいるのは、本当の愛里さんよ。でもここからは、あなた自身がしなければいけないことよね。あなた達が愛里さんを、取り戻すために」
「はい」

　背筋を伸ばし、拳を握り締めた麗子が早乙女愛里に呼び掛ける。
「早乙女さん！」
「れ、麗子、あたしから話すよ！」
　割って入った聖美を、麗子が押し止めた。
「聖美は黙ってて！　これは早乙女さんとわたしの問題だわ！」
「だ、だって、麗子！」
「早乙女さん！　わたしあなたの気持ちは本当に嬉しいの。でもごめんなさい。わたし、わたしは、聖美のことが好きなの！」
　聖美が、額を掌で打って顔をしかめる。
「ごめんなさい、早乙女さん！　聖美はわたしの気持ちを受け入れてくれたのに、わたしはあなたを突き飛ばしたりして！　先輩なんだから、聖美みたいにあなたを受け止めてあげなきゃいけなかったのに！」
　刹那の黒衣を握り締めていた愛里の指が緩む。刹那は肩越しに、身を強張らせた少女を諭(さと)した。
「・・・これでわかったでしょう？」
「あ、あの、あのあの・・・、」
「あなたが恋した先輩には、もう『恋人』がいたのよ。麗子さんと聖美は、親友以上の『恋人同士』なの。だからあなたの『恋』は実らなかった、ただそれだけのことなのよ」

　自分のした事に怯える少女の背を、刹那は軽く押して送り出した。麗子はその手を取り、聖美は肩を抱き髪をクシャクシャに撫でて迎え入れる。
「これで、あなた達の『依頼』は解決ね」
　夢世界に生きる刹那と、三人の少女が向かい合った。
「・・・まあ、今回はあなた達に助けてもらったんだから、偉そうなことは言えないけど。まずは、あなた達に渡したブローチを返してちょうだい」
「あ、あのさ、夢探偵、」
「なに？」
「ま、まさか、最初から分かってたの？　そ、その、あたしと麗子のこと、」
「そうよ、と言いたいけど、夢探偵も人の心を見通すような『魔法』は使えないわ。あなた達が夢の中でも、この体育館でいつも一緒にいると知ったから気付いたの。いつでも心の奥で、お互いを求めているような関係でなければそうはならない。たとえ『血の繋がり』があっても、そんな奇跡は起こせないわ。そういうのを、『恋』っていうんじゃないかしら？」
　麗子が頬を赤らめる。
「・・・さあ、ふたりともブローチを出して」
　麗子は丁寧に制服の胸のポケットから、聖美はスカートの奥からブローチを取り出した。差し出された刹那の掌に、麗子の指がブローチを納める。聖美は、もう一度ブローチを拳で握り締めて言った。
「これ、返さなきゃ駄目？」
「聖美、あなた達の依頼が解決したら、必ず返してもらう約束だったわよね」

「わ、わかったよ」
「・・・それでいいわ。それから、この依頼の報酬の件だけど、」
「はい、刹那さん。わたし達の夢のオブジェを、刹那さんに差し上げるんでしたよね？　わたしがこの夢世界で作り出したものがあるのなら、なんでもかまいません。どんなに大切なものを失っても惜しくはないです！　わたし達のために命を懸けてくれた、刹那さんとの約束ですから」
「ゆ、夢探偵！　あ、あたしのだって、そんなに見劣りしないと思うよ！　な、なんでも持ってってよ！」
「・・・そうね、何でもいいのなら、それが欲しいわ」
　刹那が指差した先には、潰れひしゃげた早乙女愛里の『光の卵』があった。
「あれだけの悪霊に囲まれても、結局は愛里さんを守ったオブジェだから、何かに使えると思うの。もちろん、依頼者以外が所有するオブジェだから、所有者の同意があればだけど、」
　聖美が愛里を見る。愛里は麗子を見詰めた。
「でももう愛里さんにとって、必要のないものよね？」
　愛里を挟(はさ)んで立っている聖美と麗子が、微笑んで愛里に頷く。
「・・・あ、あのあの、」
「愛里、『あのあの』じゃなくてさ！」
「早乙女さん！」
　瞳を精一杯に見開いた早乙女愛里が、力を込めて答えた。
「あ、あの、はい！」

「さあ、もうあなた達が目覚める時間が近付いているわね」
　体育館の窓から斜めに差し込んだ光が、瓦礫の中に立つ刹那達の足元を輝かせ、霧のように立ち登り始めた。
「夢探偵！」
「なに？」
「・・・も、もう会えないの？」
「そうね、だってもう必要が無いでしょう？」
「そ、そういうことじゃなくてさ、」
「大丈夫よ。ブローチは返してもらったから。あなた達が次に目覚めた時には、わたしの名前は思い出せない。三日もすれば、わたしと会ったことすら忘れるわ」
「わ、忘れるって、どういうことですか？」
「麗子さん、『夢』は『夢』よ。夢は、美しいけれど手の届かない、『月』のような存在でなければならないの。そうでなければ、人の心は簡単に夢世界に囚われてしまうわ。それがどれだけ恐ろしいことか、よく分かったはずよね。今回はあなたと聖美にも危険が及ぶかもしれなかったから、『ブローチを渡す』という形で、特別にあなた達とわたしの想念を繋がらせておいたの。あなた達には現実世界でもあのブローチを持っているという感触があったでしょうけど、それは幻よ」
「ちょっと待って、夢探偵！」

「なに？」
「よ、よくわかんないんだけど、」
「あなたはいつもそうね」
「幻とか言うけど、あたし、そのブローチを智美(ともみ)に拾ってもらったよ」
「・・・おかしいわね、『智美』って誰なの？　別のお友達？」
「あ、智美ちゃんて、聖美の妹さんなんです。まだ幼稚園の年長さんで、すごく可愛いんですよ」
「ああ、そういうことね」
「そういうことって、どういうこと？」
「・・・妹さんは、お姉ちゃんが大好きなのね。幼い子には、大好きな人が信じている物は見えるものなの。『想念』が現実世界でも無力じゃないというのはそういう事よ。でもそれは想念の光の横顔、光があれば闇があるわ。月の裏側を決して見ることが出来ないように、わたしはあなた達の記憶に残ってはいけないの」
「そんなの、わかんないよ！」
「聖美、あなたは分からなくていいわ。それがあなたの、いい所だから」
　刹那は少女達に、別れのための手を差し出した。
「さあ、お別れよ」
　麗子が両の掌で包んで受け取る。早乙女愛里も麗子の微笑みに促(うなが)され、そっと手を添えた。
「麗子さん、新体操、頑張ってね」
「はい！」
「まあ、こんなに一生懸命な『彼氏』がいたら、頑張らないわけにいかないわね」
「か、『彼氏』って！」
「それがうるさい時も、あるでしょうけど」
　麗子は刹那に、舌を出して笑ってみせる。
「愛里さん」
「あの、はい！」
「あなたの面倒をみるのは、これきりにしてちょうだい。あなたにはこんな素敵な先輩が、ふたりもいるんだから」
　潰れそうに身を縮める愛里を横目にしながら、手を伸ばしそびれている聖美を刹那が見据えた。
「それから聖美、」
「な、なに？」
　少女達に預けた右手はそのままに、刹那は左の掌を裏返して聖美の鼻先に突き付けた。
「元気でね、」
　刹那が左手の指を鳴らすと、刹那からは三人の少女が消え、少女達の前からは刹那が掻き消えた。
「夢探偵！」

エピローグ　「手紙」

　夢世界。聖家族教会の奥まった自室で、刹那は鏡台の前に座っていた。想念を込めれば『越界の鏡』となり、「現実世界の刹那」を映し出すことも出来る大きな鏡面には、三日前に届いた手紙を指先で弄(もてあそ)ぶ刹那が写っていた。
「・・・まったく、困ったわね」
　愛らしい封筒には『真木刹那さま』、裏には『早乙女愛里』とある。
「・・・刹那さま、」
　刹那の肩を叩くように、『キリスト像』の声が響いた。
「なに？　新しい依頼者？」
「そうではありません」
　刹那の頭上から、また新しい手紙が舞い降りてくる。
「ちょ、ちょっと！」
　同じ封筒に、同じ文字。思わず受け取ってしまった手紙を手に、刹那が叫んだ。
「だ、だってもうあれから十日も経つのよ！　なんであの子がわたしの事を忘れないの？
　こんな形でわたしに想念を届けられるなんて、おかしいわよ！」
「・・・それはその、あれだけのオブジェを作り出した方なのですから、それなりに強い想念の力をお持ちなのでは？」
「だいたいこんなもの、あなたが受け取るからいけないんじゃない！」
「刹那さま、それは無理というものでございますよ。小鳥の姿をしたその手紙が飛んできてはわたしの肩に留(と)まり、いつの間にか手紙になってしまうのですから。見ぬふりをして振り払おうにも、わたしは磔の石像でございます。主人である刹那さまの、『信書の秘密』を侵すわけにもいきませんし、」
　封を解かれた便箋には、少女らしく丸い愛らしい筆跡で、刹那への感謝ともう一度会いたいという想いが綴(つづ)られていた。
「・・・まったくもう、」

　手紙を読み終えた刹那の微笑みに、キリスト像が囁(ささ)く。
「迷惑とお思いのわりには、優しいお顔をなさっていますよ、刹那さま」
「・・・で、でもあの子、本当に『同性』が好きなわけじゃないわよね？」
　刹那を見守る、キリスト像の想念が破願(はがん)した。
「刹那さまが接吻(せっぷん)などされるから、『目覚めた』のかもしれませんよ？」
「あ、あれは！」
「冗談でございます」
「な、なによ！　やっぱり最近、あなた傀儡(パペット)のくせに生意気よ！」
「パペットも長くやっておりますと、冗談くらいは覚えます。でも刹那さま、本当は刹那さまが、あの方達にもう一度会いたいと思ってらっしゃるのではありませんか？」
　瞳を伏せた刹那が、何かを確かめるかのような、僅(わず)かな沈黙の後に答えた。
「・・・そうね。あの子達と、お買い物をしてお喋りをして、映画を見に行ったりもしてみたかったわね」

「・・・刹那さま、」
「なに？」
「その願いはいつか必ずかないます。必ずできますとも。そのために、刹那さまはこの夢世界で戦い続けてらっしゃるのですから」
「・・・本当に、そうなのかしら？」
「そうでございますとも！」
「・・・そうね」

　黒い夢探偵「真木刹那」は、唇を強く結ぶと、鏡に映った自分が愛撫していた『手紙』を、鏡台の上の小箱に納めた。

（終）